自重しないと

美少女助手の甘デレ事情と
現代異能事件録

高町京
TAKAMACHI KEI
イラスト 東西

小泉花音は

こいずみかのん

特別試読版

GA文庫大賞
GA BUNKO AWARD
第11回
奨励賞
私のチカラでメロメロにしちゃうからね、れー君!
イチャウザヒロインと紡ぐどんでん返しに瞠目せよ!
GA文庫

プロローグ

「あ、来たよ」

目の前の女――小泉花音（こいずみかのん）がそう囁（ささや）いた。美少女と言うべきか、美女と言うべきか。確か俺（おれ）の二つ上の十九歳だったはずだ。

蒸（む）し暑い夏の深夜。繁華街から外れた薄暗い路地裏。そこに現れたのは、見るからに粗暴そうな男だった。その姿に、息を潜（ひそ）めていた俺たちにわずかな緊張が走る。

「じゃあ行ってくるから、れー君はそこで待っててね」

声を殺して、花音が言う。

れー君というその間抜けな呼び名に思うところがないわけでもないが、こいつは何度言っても改める様子はない。そんな俺の忸怩(じくじ)たる思いなど一切(いっさい)気にせず、花音は物陰から飛び出していった。男の前に立ちふさがり、揚々(ようよう)と声をかける。

「やあ、こんばんはお兄さん。お兄さんにちょっとだけ用があってね。すこーし時間をもらえないかなー」

「な、なんだっ？」

急に現れた花音の姿に、男はたじろいで足を止める。

「――っと、なんだ、随分可愛(かわい)い姉ちゃんじゃねえか。びっくりさせんなよ……」

薄闇(うすやみ)に立つ花音の姿を確認し、男は警戒を解き、安堵(あんど)の声を漏(も)らす。無理もない。黒いキャミソールに、赤いチェックのフリルスカート。白い腿を強調するニーハイの足元は、編上げの白いブーツで飾っている。肩口で左右二つに縛った長いテールは、大人ツインテールという奴(やつ)か。そのテールをふわっと揺らし、花音は小首を傾(かし)げてみせる。

「商売女か。一晩いくらだ？　気に入ったぜ、買ってやるよ」

男が言う。全体的に薄着で露出の多い花音の姿でそう判断したのだろう。

しかしそこまで見たのなら、もっと注意深く観察し、

気づくべきだ。フェミニンな彼女の格好の中で唯一、そのブーツだけは男物で実用性を重視しているだろうという事に。

そんな男の下卑（げび）た言葉には一切取り合わず、花音は声のトーンを落とし、淡々と告げる。

「勅使河原晃（てしがわらあきら）。二十七歳。フリーター――そして、発火能力者（パイロキネシスト）」

「――！」

花音のその言葉に、男は顔色を変える。

「先週露見した焼死体事件の容疑者として拘束します。従うなら良し、逃亡や抵抗をした場合、あなたの処分を許されている」

「てめえ、バスター……ハウンドドッグか！」
「残念。バスターだけど、ストレイドッグのほうだよ」
「より面倒じゃねえか……！」
男は歯噛みして身構える。
「……確かに俺は発火能力者（パイロキネシスト）だ。けどそれだけで容疑者ってのはひどいんじゃねえか？」
「あなたにとって残念なお知らせだろうけど、現場検証で精神観測者（サイコメトラー）があなたを犯人と特定してる。繰り返します。勅使河原晃、あなたを殺人――特異犯罪の容疑で拘束します。大人しく――」
「くそったれ……！」
叫び、手を振りかざす男。その手のひらの先に、ごう

っと渦(うず)を巻く炎が現れる。

「れー君！」

その様を見た花音が叫ぶ。そう怒鳴らんでもわかってる。男が手を振りかざした時、俺も自分の能力を使うべくこの手を虚空(こくう)に向かって掲げていた。

俺のその仕草に呼応して、花音の目の前に一振りの剣――細身の、片刃の長剣が現れる。俺の異能――物質転移(アスポート)で、彼女がここに置いていったものを転移させたのだ。宙空に現れたその柄(つか)を、花音は手を伸ばして摑(つか)み取る。

「な――んだと？」

男は驚き――それでもそのまま炎の渦を花音に向か

って解き放った。さながら火炎放射器のように業火がうねり、花音に襲いかかる。

しかし、花音は動じなかった。まるで踊るかのようにその場でくるりと回り、横薙ぎの斬撃で炎を両断する。

「――っ？　炎を斬った、だと？」

悲鳴を上げ、男は驚愕に動きを止める。そして――

花音は、その男の左胸に剣先を突き込んだ。じわりと男のシャツに血が滲む。

「勅使河原晃。後何センチ剣を押し込めば切っ先が心臓に届くと思う？　これ以上抵抗せず、大人しく連行されるというなら私もこの場であなたを処分しようとは思わない。さて、どうしようか？」

剣先のわずか数センチを男の胸に刺した状態で、花音が冷たく言い放つ。シャツの赤い染(し)みが広がっていくが、当の男は致命傷を負ったという様子ではない。

花音は男の体ではなく、心臓へ寸止めしたのだ。

「……へっ、腕は相当なもんだが、やれるのか？　よく見りゃまだ手足伸び切ったばっかのガキじゃねえか。マジで人バラそうってえのかよ、あ？」

「なめないで欲しいね。私が今まで何人処分してきたか教えてあげようか？　あなたは知らないだろうけど、私たちバスターは特異犯罪者を殺しても心が痛まない。そういう風に訓練されてるんだよ。試してみる？」

嘘(うそ)だ。俺もバスターだ。自身の手で幾度も経験済みだ

が、どんなに凶悪な犯罪者でも手にかければ心は重くなる。

しかし、男は花音の言葉に気圧(けお)された。力なく項垂(うなだ)れ、降参の意を示すべく両手を上げる。

「……わかった、従う。だから」

「交換条件は受け入れない。従うというのならゆっくりと地面にうつ伏せになりなさい。ゆっくりよ？　そう……手は頭の上で組んで」

男が体を低くするのに合わせて刺したままの剣を上手(うま)く操(あやつ)り、地面に伏せる直前で抜く。そしてその切っ先を今度は男の首筋に当てて、再び告げる。

「今からハウンドドッグを呼びます。それまでそのまま

の姿勢で。動いたら首と胴がお別れだからね」

「ああ、わかった……わかったから！　首には刺さないでくれ……！」

剣先を刺そうと押し込む花音と、悲鳴を上げる男。決着はついた。

楽な相手――だったわけではない。そもそも楽な相手なら俺たちの出番はない。普通のものより頑丈ってだけの長剣で、発火能力者（パイロキネシスト）が操る炎を薙ぎ払（はら）う花音が規格外なのだ。

ともあれ、片は付いた。ほうっと息をつくと、ハウンドドッグへ出動を要請する電話を終えた花音と目が合う。安心したように、花音が俺に向かって顔を綻（ほころ）ばせた。

相手の男がいなけりゃ「やったよ！」とでも言いたげな顔だ。無邪気で、それこそ街を歩けば誰(だれ)もが振り返りそうな笑顔。

鋭い視線と冷酷な声音(こわね)で凶悪な特異犯罪者をやり込めた少女のものとは思えない。

気を抜くなと言いたいところだが、仕事は終わったのだ。後はハウンドドッグの連中にこの男を引き渡すだけ。

相手に見えないように顔を綻ばせるぐらいは構わないだろう。

◇

◇

◇

一九八〇年代。世界は一時的に恐慌状態に陥（おちい）った。

急増し始めた、いわゆる突然変異と呼ばれるもののためだ。それも、それまで散見されていた突然変異とは明らかに違う特徴を持つもの。

特異体。これまでの突然変異と一線を画す新たな突然変異の個体を、当時の研究者たちはそう呼称した。

その特異体はありとあらゆる生物に生まれた。動物は勿論（もちろん）、マグロの特異体が釣り上げた船を襲ったなんて話もある。そして最も多く特異体が生まれた生物は、霊長目ヒト科ヒト属ヒト――人類だ。

特異体に分類される突然変異の特徴は、平均的な個体を凌駕（りょうが）する生命力や体力、そして――これが特異体と

呼ばれる最大の理由だが――異能の力。一般的に超能力と呼ばれる部類の能力から、まるで魔法のような不可思議な能力まで、そのバリエーションは様々。

人の特異体が出始めた頃は、バラエティ番組なんかで取り上げられたりしていたらしい。しかし、異能の力を持つ者が驚くほど希少なものではないらしいとわかると、その扱いは珍しいものから恐れ、畏怖するものへと変わった。次第に、特異体の異能を使った犯罪が増え、社会問題へと発展した。

世界中が恐慌に陥ったが、各国はそれぞれ自国の問題に目を向け、独自に解決案を打ち立てる。結果として、どの国も同じような政策を施した。

日本政府は異能の力が絡(から)んだ事件や事故を特異犯罪、または特異災害と定義付け、これらの問題に取り組む機関『対特異災害統括室』、通称ＭＤＣを発足。それに紐(ひも)付けて、特異犯罪の捜査や解決に当たる訓練された特異体『バスター』を育成し、その部隊『ハウンドドッグ』を設立、各地に配備した。

一時はそれで沈静化したものの、時間をおいて更に激化する特異犯罪は、強力な特異体の出現と特異体の犯罪傾向の高さを裏付けていた。

だが、強力な個体の出現はバスター側にもあった。ＭＤＣ及びハウンドドッグに属さない、フリーランスのバスター。部隊に属さずとも危険度の高い特異犯罪者と戦

い、拘束、または処分して平和に貢献する、現代のバウンティハンター。ハウンドドッグに対し、『ストレイドッグ』と呼ばれる強力なバスターたちだ。

ストレイドッグが台頭し始めると、特異犯罪者も鳴りを潜め、世界は恐慌状態を脱し仮初（かりそめ）の日常を取り戻した。だが特異犯罪がなくなったわけではない。警察が機能していても、犯罪がゼロにならないのと同じだ。

そして、二〇一八年現在。

俺と花音は、ストレイドッグとしてコンビを組んで活動している。

第一章　動因、あるいは蠢動

「ヘイヘイ、れー君ビビってるう」
ビビってねえ。
明けて、翌日。俺(おれ)と花音(かのん)は、拠点としている花音のアパートのリビングで、テーブルを挟んで対峙(たいじ)していた。
テーブルの上に鎮座するのはタブレット端末。客が来るのを待つ間、このタブレットで暇を潰(つぶ)すべくオセロに興じていたのだが。
「私の曇りなき美少女アイによると、もう私の勝利は揺

るがないっていうか？」

液晶の盤面は白が六割強といったところか。白が花音で、黒が俺。手番は俺で、どこに打つべきか悩んでいるのだが……

「へイれー君、もう負け戦（いくさ）だぜ。早く打っちゃいなよ、考えても無駄だって」

なんだと？

「今のうちに降参するなら、この花音お姉さんにいいこいいこしてもらえる権利をあげちゃおう。やったね！」

この野郎、こっちがどう手加減してやろうか悩んでりゃあ調子に乗りやがって！

俺は最初に思いついた、手加減なしの一手を打った。

タブレットにポンと触れると、盤面の白駒が面白いようにひっくり返り、

「……あれ、ちょま、待って……」

その様子に余裕の態度を見せていた花音が慌て始める。

が、当然タブレットの雑なアニメーションは止まらずに

「……わーお」

六四で白の攻勢だった盤面は、七三で黒の優勢に切り替わった。しかも白はどこに置いても二、三枚しか返せない。

「ね、ね、れー君。ちょっと今の一手待って欲しいなー……」

ノー。俺は胸の前で手をバツ印にクロスさせる。

「お願いだよー。いいこいいこしてあげるから」

いらんわボケ。

「……」

死んだ魚のような目になった花音は、恐る恐る盤面のマスをタッチ。白駒が置かれ、ぺたんぺたんと二枚ほど黒駒が裏返り、白駒に。しかし次の俺の一手で、わずかに増えた白駒が無情にも黒駒に戻る。

「なん……だと……」

花音がわなわなと手を震わせる。ったく、せっかく手加減してやってたのに、調子に乗るからだ。可愛(かわい)くしてりゃあ負けてやったのによ。

しかし、これでしばらく拗ねるんだろうな。めんどくせえ……などと考えていると、室内にインターフォンの呼び出し音が響いた。

「おっと、お客さんが来たよ？　オセロは一旦中止だね！」

花音はわざとらしくそう言って、タブレット端末を操作する。あっ、この野郎、タブレットをスリープにするんじゃなく、対局中のオセロを終了させやがった！

再び、インターフォン。

「はいはーい、今出ますよー」

玄関に向かってそう返し、花音はパタパタと駆けていく。くっそ、あいつ……一度徹底的にわからせてやらね

えと。というかインターフォンあるのに直接玄関行ったな。まあ、来客予定があったわけだし、誰(だれ)が訪ねてくるかはわかっているのだが。

案の定、覚えのある声が玄関から聞こえてくる。

「いらっしゃい琥珀(こはく)さん、さ、どうぞどうぞー」

「お邪魔させてもらうわね」

言葉を交わしつつ、先導する花音に続いてリビングに現れたのは、ジャケットにペンシルスカートでパリッときめた妙齢の女性、白坂(しらさか)琥珀さんだ。明るい色のロングヘアで、目元はフレームレスのメガネで飾っている、大人っぽくてかっこいい女性。ショルダーバッグの他に、ブリーフケースを持っている。あと美人。超美人。美し

い。

確かアラサーだったはずだが、二十歳そこそこでも十分通じる。バイーンでキュッとしてるところがまた男子的にたまらない。どこがどうだとかは言うつもりはないが、とにかくバイーンとしてキュッっとしてるのだ。ついでに言えばスラリともしてる。いいねボタンがあったら連打してるね。

その琥珀さんがリビングソファに座る俺を見ると、にこっと顔を綻(ほころ)ばす。

「あら、れー君。こんにちは。元気にしてる……って、これは？　何か作業中だったかしら」

言いながら、テーブルでホーム画面を表示するタブレ

ット端末を見つけた琥珀さんが、花音に問いかける。
「琥珀さん来るまで、れー君とオセロして待ってたんですよ」
「あらあら。で、どっちが勝ったの？」
「あのね琥珀さん。私、なんでも勝ち負けで論ずるのは良くないと思うのですよ。争いは何も生まない不毛なコミュニケーションです。手を取り合って仲良くするのって美しいと思うんですよね。優しい世界に生きていたいです」
「そう、負けたのね」
「いや何言ってんですか、琥珀さん。私は負けてないですよ。勝つとか負けるじゃなくてなんていうかオセロと

いうゲームに興じていただけで、勝敗とかそういうのは別っていうか」

「駄目じゃないれー君。花音さんは女の子なんだから。こういう遊びは負けてあげて、喜んではしゃぐ女の子を見て楽しむものよ？」

ムキになる花音を哀れみの目で見て、琥珀さんは俺をたしなめる。

違うんです琥珀さん。俺も最初はそういうつもりだったんすよ。そしたらその馬鹿野郎が調子づいて、超上から目線で煽ってきたんで。

とまあそんな言い訳を並べたところで、言い訳は言い訳にすぎない。俺は嘆息してソファから立ち上がり、キ

ッチンへ向かう。

「あら、れー君怒らせちゃったかしら？」

「れー君ああ見えて結構ナイーブなんですよ。でも忘れっぽいんで、気にしなくていいです」

馬鹿言ってんじゃねえ。お前ほど忘れっぽくねえよ。

しかし胸中でそんなツッコミを入れる俺をよそに、二人はリビングで会話を続ける。

「では改めて――小泉花音さん。昨夜の特異犯罪者確保、お疲れ様でした。こちらが事後手続きの書類になります。要請通り、即時処分ではなく確保していただいたので報酬のほうは満額となります。既に金融機関に振り込まれているはずですので、後ほどご確認ください」

琥珀さんが居住まいを正し、ブリーフケースから書類束(たば)を取り出して、花音に差し出す。

この見目麗(うるわ)しいお姉さんは、ハウンドドッグの事務官なのだ。主にストレイドッグとの折衝(せっしょう)を担当していて、ハウンドドッグからストレイドッグへの依頼や、それに関(かか)わる事務手続きなんかを一手に引き受けている。場合によっては現場指揮もするらしく、その姿も何度か目にしている。

もともとバスターとしてハウンドドッグに所属していたそうなのだが、任務中の負傷をきっかけに事務方に回ったそうだ。確か念動能力者(サイコキネシスト)と聞いた気がするが、事務方に回ったあたり、突出したバスターではなく、現場に

未練もなかったのだろう。それでも現場指揮を任されるところが彼女の優秀さを裏付けている。

「はーい、ありがとう琥珀さん」

花音は差し出された書類を受け取り、それをぱらぱらとめくって――

「昨日の犯人、やっぱり死刑じゃなくて懲役刑なんですか？　まあ、依頼内容に確保が望ましいってあった時点で、そうなのかなとは思ってたんですけど」

そう尋ねる。どうやら書類にそういった記述があったらしい。

特異犯罪は大抵の場合、容疑が固まった時点で死刑になるケースが多い。現場での即時処分が容認されるのも

そのためだ。被害者に死者が出ていれば容認どころか処分推奨。

裁判もなく死刑なんて……と最初は思ったものだが、機関銃を乱射するテロリストがやむなく銃殺されてしまうケースと同様だ。特異犯罪者に対して確保を最優先目的に据(す)えた場合、こちらや民間人の命に危険が及(およ)ぶ。

「ええ。他県での未解決事件に火災関連がいくつかあるのよ。彼は発火能力者(パイロキネシスト)で、出身地は県外。発火能力(パイロキネシス)はそう珍しい能力でもないけれど、ちょっと臭うと思わない？」

「ああ、そういう……」

含みのある言い方をする琥珀さんに、花音は納得して

頷(うなず)く。他所(よそ)で起こした事件が当人の手によるものかどうかを確認したいということだろう。

「それにしても」

ぽつりと、花音は寂(さび)しそうに、

「他県の特異犯罪者が逃げ込んでくる街になっちゃったのかぁ……」

「まだそうと決まったわけじゃないけれど、一年前からは考えられない状況よね」

花音の言葉に、琥珀さんが大きく頷く。

俺と花音が拠点とするここN市は、都心からもそこそこアクセスの良い地方都市だ。駅近くはそれなりに栄え、しかし二駅三駅離れると、広い田畑がそこかしこ。言っ

てしまえばありふれた街だと言える。
だが、他所とは決定的に違う点が一つあった。
それは、日本最強とも謳(うた)われたバスターが、ここN市を拠点として活動していたという事。
その轟(とどろ)く雷名の下、かつてのN市は日本で最も特異犯罪の少ない街だった。それは特異体でなくとも有名な話だ。
しかし。
「一年前、『彼』は姿を消してしまった……」
琥珀さんが思いを馳(は)せるようにため息をつく。
「小泉玲紀(こいずみれいき)。存命なら十七歳。《剣帝》の異名で呼ばれ、若くして日本最強とも謳(うた)われるバスター。特殊能力(ユニークスキル)の

『彼方より手繰る千刃（ソード・オブ・ファンタズム）』を操（あやつ）り、どんな特異犯罪者も名前を聞くだけで震え上がった超人……」

日本のバスター関係者なら、誰もが知る少年。その小泉玲紀のプロフィールを、琥珀さんが口にする。

「けれど、突如行方（ゆくえ）不明に。音信も不通。私がこの街に赴任してきた十ヶ月前には、彼の姿はもう影も形もなかった。彼ほどのバスターがそう簡単にしくじったりしないと思うのだけれど……考えただけで頭が痛くなるわ。小泉玲紀が姿を消して、この街の犯罪件数は徐々に上がっている。このままでは治安にも影響が出るだろうし、外国に対する日本の国防も……」

「ある意味では国防の要（かなめ）とも言われていましたからねー」

頭を抱える琥珀さんに、花音が苦笑いで言う。

「そうね。今のところその兆候はないけれど、特異体を主力にした戦争が始まったりした日には、彼の力なしにどうやって他国に対抗すればいいのやら。絶対的な特異体の数では中国やインドには遠く及ばないし、単純な火力だとアメリカの音に聞く《破壊王》なんかには太刀打ちできないし……」

「彼は、そんな無茶な戦力差でもひっくり返せるトンデモ能力のバスターでしたからねー」

「……トンデモ能力っていうのなら、あなたも負けていないと思うけど？」

「いやいや、私なんかじゃ日本が誇る《剣帝》には敵いない

ませんよ」

琥珀さんの言葉に、花音は苦笑いで首を振る。

「その《剣帝》は失われてしまった……という見方が大多数。私個人としては信じたくないけれどね。どのみち特異体を中心にした能力戦争が始まってしまったとして、国防を一人の英雄に任せるようじゃ国として息は長くないでしょう」

「うーん、日本じゃ戦争っていうのはあんまりリアリティないんで、そのへんはちょっと想像しづらいです。それよりも、治安の悪化は身近な問題だしそっちのほうが気になるっていうか」

「……そうかもしれないわね」

花音の言葉に、琥珀さんがもっともだと言わんばかり

に頷いた。

実は、俺と花音は独自にとある事件を追っている。その犯人の手がかりを探すため、時間を作ってはパトロールを兼ねた捜査をしている……のだが、その際に街のあちこちでいかにもな人相の連中を見かけることが多くなった。暗がりや路地裏――その手の連中が好みそうな場所で、だ。この一年、大きな事件こそないものの、特異犯罪件数はゆるやかに増えているというのもハウンドドッグのデータに残っている。

「私たちとしては、市民の安全のためにも目の前の問題に目を向けないといけないわね」

深く息を吐く琥珀さん。そしてふと、何かに気づいた

ように顔を上げる。

「そう言えば、彼……小泉玲紀ってあなたと同じ苗字(みょうじ)ね。活動地域も一緒だし……もしかして親戚だったりするの？」

「彼と私は、同じ施設の出身なんですよー」

「施設？」

「ええ。こいずみ園って言うんですけどね。特異体児童養護施設です」

「あ……」

琥珀さんは顔を青くした。態度を改め、花音に頭を下げる。

「その……ごめんなさい。迂闊(うかつ)だったわ」

「いえいえ、そういうのは割り切れてるんで……こいずみ園では、みんな園長先生の子供になるんです。だから、私は彼の姉で……彼が初めて園に来た時、私が遊んでげたんですよー」

「へえ、そうだったの」

「ええ。彼がうちの子になったのは、私が五歳、彼が三歳のときで……今でも覚えてます」

懐かしむ花音に、琥珀さんが続けて尋ねる。

「最強のバスターにも三歳児の頃はあるわよね。ねえ、その頃の彼はどんな子供だったの？」

琥珀さんは、純粋に《剣帝》の幼少時代を聞きたくてそう聞いたのだろう。花音が思い出話でも語ってくれる

だろうと期待して。しかし――それは叶(かな)わない。

憂い顔で昔を懐かしんでいた花音の顔が、だらしなく崩れる。

「そりゃもうべらぼうに可愛くて……でへ」

「花音さん、その、涎(よだれ)が……」

「おっといけない。淑女らしくなかったですね……もうほんと可愛いすぎて意味不明なくらいでしたよ。一生眺めていたい。好き」

拭(ぬぐ)っても拭っても垂れる涎に、琥珀さんがさっきとは別の意味で顔を青くする。

「えっと、あの、花音さん……」

「なんです？」

「えっと……その、保育園や幼稚園には近付かないでね？　ハウンドドッグとしてあなたを処分するような事はしたくないし……」

「馬鹿な！　そんな事を私がするとでも？　イエスショタコンノータッチ！　見返りなど求めず、遠くからそっと見守るのが愛ですよ！　近づいて怖がらせるようなことはしません！」

「自覚はあるのね……」

「まあ、向こうから「お姉ちゃーん」とか言って近づいてくるのであれば話は別ですが。もう抱きしめて放しませんよ。ずっとこの腕の中で愛でていきます。一生です」

「保育園や幼稚園には近付かないでね？　絶対よ？」

花音が琥珀さんの信頼を失った瞬間である。

すみませんね琥珀さん。うちの相棒がこんな大馬鹿野郎で。

「それは確約できかねますが……あと、彼は私の師匠でもあるんです」

「師匠……って、バスターの？」

「はい」

琥珀さんの言葉に、花音が頷く。

特異体がバスターになるには、大きく分けて二通りの方法がある。

国の育成機関でその資格を得るか、資格を持ったバスターの下で修練を積むか。

花音は後者でバスターの資格を得た。ついでに言うと俺は前者。

「彼が独立した時に、私、園を飛び出して押しかけたんですよ。私もバスターになるから弟子にしてくれーって」

「ええと……確か、小泉玲紀がストレイドッグとして活動し始めたのは二年前くらいだったわよね？　あなた、その頃ってまだ高校生じゃないの？」

「辞めちゃいました。彼も高校行ってなかったし、バスターになるなら学歴関係ないし」

花音が、はにかんでペロッと舌を出す。

「まあ、彼は児童の頃からバスター界隈じゃ名前を知らない者はいない、ってくらいのエリートだったしね。小

一で志願して、育成機関での英才教育の下、十二歳でバスターとしてハウンドドッグへ配属。その三年後ハウンドドッグを退役して、ストレイドッグに。花音さんはこのタイミングで弟子入りしたってわけね」

「そうです。でもそのプロフ、間違ってますよ？」

「まさか。これでも私、元ハウンドドッグのバスターで、今はハウンドドッグの事務官よ？　《剣帝》のプロフィールなんて、この界隈じゃ常識じゃない。間違えて覚えてるなんてこと、ないと思うけれど」

実際、琥珀さんが口にした小泉玲紀の――日本最強と噂（うわさ）される《剣帝》のプロフィールに間違いはない。ないが――

花音が言う。

「プロフそのものが違うんです。おかしいと思いませんか？　遊んだり甘えたり――そんな盛りの男の子が、自ら望んでそんな環境に身を置こうとはしないですよー」

バスターの育成機関は――わかりやすく例えれば自衛官学校みたいなものだ。異能を操る犯罪者に抗するため、自身の異能は勿論（もちろん）、軍隊式のトレーニングで心身ともに鍛える。いくら特異体が身体能力に優れるとはいえ、それに見合ったカリキュラムが課されるので相当にハードだ。

「言われてみれば、確かに……でも、英雄視されるような人だもの。そんなものじゃない？」

「いえ、彼は少し甘えん坊だけど、普通の男の子でしたよ。ただ特異体で、珍しい能力を持っていただけの、普通の男の子」

「……普通の男の子が、どうして育成機関に？」

少し躊躇(ためら)って、それでも好奇心が勝ったのか、琥珀さんが疑問を口にする。

「私のせいなんです」

花音が、懺悔(ざんげ)するように呟(つぶや)いた。ここから先は聞いていて気持ちのいい話じゃない。だからと言って花音が口を閉ざすことはなく、話の続きが聞こえてくる。

「やっぱり、そういう施設にいるっていうの、どっかから漏(も)れちゃうんですよ。で、小学生くらいってまだ罪悪

感とか薄いじゃないですかー。どうしてもからかわれたりしちゃって」

「そうね、そういう事はあるかもしれないわね」

「ええ、今となってはそういうのもわかるんで、もう気にしたりはしてないんですけど……でも、小三の頃の私はちょっと傷つきやすい子だったんですねー」

「小さい頃のあなたはとてもキュートだったんでしょうね」

「そりゃもう！　全人類の妹的存在、それが私！　保護欲煽りまくりですよ！　……って、それ今はあんまり可愛くないって事ですか？　今は全人類の隣の家のお姉さんポジと自負してるんですけど。部屋のカーテン開けた

ら偶然にもいつも着替えてる途中できゃっ、的な」
「……今も可愛くて素敵よ。着替えてるかどうかはわからないけれど」
「ありがとうございます！」
琥珀さんの言葉に、花音はにっこりと微笑(ほほえ)む。
「……で、ちっちゃくて保護欲煽りまくりな私は、小の普通の男の子の保護欲も煽っちゃったんですよねー。近所の子に親なしって言われて、もうこれでもかってくらい大泣きしてるところを彼に見られちゃって。優しくて可愛い大好きなお姉ちゃんを探していたら、優しくて可愛い大好きなお姉ちゃんが泣いてたってわけですよ」
「……当時は妹的存在じゃなかったの？」

「彼に対してはいつだっておとなくて勇敢な彼は」
「普通だったんじゃ」
「優しくて勇敢で普通の男の子だった彼は、私を助けてくれました。後に《剣帝》なんて呼ばれるその力を使って。子供でしたし、相手も重傷を負いましたが死には至らなかったので、処分は免れ(まぬか)ました。でもそのせいで危険性帯有特異体監督署に収容されたんです」
花音は、言葉にしても文字にしても面倒な施設の名を口にした。
危険性帯有特異体監督署。犯罪傾向の高い特異体を収容し、管理する政府機関だ。刑務所の一歩手前と言えば

わかりやすいかもしれない。一度収容されると、娑婆(しゃば)に戻るのは難しいとされている。それだけ特異犯罪が危険視されているということだ。

「監督署に収容されてからは、もうどうやっても連絡が取れなくなっちゃって。でも彼がハウンドドッグを辞めてストレイドッグになるって時に、こいずみ園に手紙が来たんです。元気でやってるよって」

感慨深そうに吐露(とろ)する花音。表情から、胸の内が窺(うかが)える。感謝と自責……そんな顔だ。

「連絡が取れなかったから、監督署から育成機関に移ってるなんてことも全然知らなくて。その手紙読んだら私感極(かんきわ)まっちゃいましてねー。それでそのまま園を飛び出

して、押しかけて弟子入りしたんです」

「そうだったの……それは確かに、英雄の幼少時のプロフィールとしてはちょっと表には出しにくいわね」

「ええ。だからきっと、MDCの偉い人とかが作ったんですよ。英雄らしいプロフィールを」

暗い声で、花音が続ける。

「彼はあんまり話してくれなかったけど、すごく大変だったと思います。監督署も、育成機関も。きっと私を助けたことを後悔してる。だから私、私もバスターになって、彼を支えたいって思ったんです。私のせいで辛(つら)い思いをした彼を支えたいなって。それから二年……今から一年前ですね。ようやく私もバスターになって、これか

らって時に……」

「彼が失踪してしまったってわけね……」

花音の告白に、琥珀さんが長い息を吐く。

そして。

「ねえ花音さん。私は彼と面識がないけれど、それでも断言できるわ。彼、きっと監督署に収容されたことも、バスターになったことも、あなたのせいだなんて考えていないはずよ」

「……そうでしょうか」

「そうよ。勇敢な男の子だったんでしょう？　そんな子が、大好きなお姉ちゃんを助けて後悔なんてするはずないもの」

「だったら、そんなに嬉しいことはないですね」
そう言って笑う花音の声は、先に比べて幾分明るくなっていた。

バスターの朝は早い。なんて事はない。
ハウンドドッグなら特殊ながら公務員だし、三交代制だからローテによっては朝が早い事もある。けれど俺や花音のようなストレイドッグは自由業。仕事がなければ惰眠を貪れるというわけだ。
逆に言えば、仕事なら――特に急を要する仕事なら、朝も夜もあったもんじゃないのだが。
明くる日の朝。早朝というほどでもないが、仕事のな

い日は間違いなく寝ている七時頃。

昨夜、リビングで寝落ちしたらしい花音のスマホが着信音を奏でていた。

そっと画面を覗き込むと、どうやら電話をかけてきているのは琥珀さんのようだ。

おい馬鹿野郎、電話だぞ。

しかし花音は起きそうにもない。ソファであられもない姿を惜しげもなく披露している。部屋着にしているタンクトップは大きくめくれて腹は丸出し。ホットパンツはずり下がってパンツが見えている。四肢を投げ出し大口を開けていびきをかくその姿は、あられもない姿というよりは醜態と言った方が適切かもしれない。ついでに

涎も垂れている。

仕方なく、花音を起こそうと肩を揺する。

すると。

「……うーん、れー君……肩を抱くなんて積極的い……」

起きるどころか、とんでもない寝言を言った。どんな夢見てやがんだ。

寝顔を晒(さら)し続ける花音をさらに揺すると、

「……いいよ。そんなに言うなら……私の初めて、れー君にあげる……」

そんな事を宣(のたま)って、口をひょっとこのように突き出した。

そうか、お前がそういうつもりなら、俺も覚悟を決めよう。男らしく、俺の初めてで応(こた)えてやろうじゃないか。

俺は花音が突き出したその口（涎付き）に狙(ねら)いを定め、生まれて初めて寝ている女にパンチをお見舞いした。

「痛い！」

さすがの花音も飛び起きる。

「はっ、れー君？　乙女(おとめ)の寝込みを襲うのは反則じゃないかな？　しかも愛が痛いよ？」

口元を押さえて呻(うめ)くように花音が言う。そんな事を抜かしてる暇があるなら、涎拭いたり腹だの足だの隠したりしたほうが良いんじゃないですかね？

ともかく、やっと起きた花音にスマホをずいっと差し

出す。よほど火急の件なのか、未(いま)だに着信音が続いていた。

「あー、電話か……仕事かな？」

呟いて、花音は俺にも聞こえるようにハンズフリーモードで電話を取る。

「もしもーし、おはようございます琥珀さん」

『おはよう花音さん。あとワンコールで諦(あきら)めようと思っていたわ。昨夜は遅かったの？』

「えっと、繁華街辺りを深夜パトロールしてまして」

『あら、治安維持に努めてくれているのね。ありがたいことだわ』

花音の言葉に、琥珀さんが礼を言う。

しかし礼を言われるほどのことではない。義務こそないもののパトロールは俺たちの仕事の一つだし、俺と花音が追っている事件――その捜査のついでのパトロールだ。

それに、花音が中々起きなかったのには別の理由がある。

「それで帰ってきて何気にテレビつけたら、外国のサッカー中継やってたんですよ。深夜の海外スポーツ中継って、見始めるとついつい最後まで見ちゃいますよねー」

『わからなくはないけどね……』

スピーカー越しに琥珀さんの呆(あき)れた声が聴こえる。こいつ、Jリーグもワールドカップも興味ないのに、セリ

エAとかブンデスリーガとかの中継は無駄に見るんだよな。オフサイドもわからねえくせによ。花音の中のサッカーの反則は全てハンドだ。チャージングもキッキング も全部ハンド。ゲーム機は全部ファミコンの母ちゃんかよ。

『まあ、それはともかく、仕事の依頼があります。現場が近いので急行してもらえないかと思いまして』

「いいですよー。けどこんな朝っぱらから事件とは、いよいよこの街の治安も地に落ちたって感じですねー」

『いえ、今回は事件ではなく、災害のほうで』

「……なるほど」

仕事モードに切り替えた琥珀さん。その口から飛び出

した言葉に、寝ぼけ半分だった花音の目が覚めたようだ。自然とその目に鋭いものが宿る。

特例を除けば、大きく分けてバスターの仕事は二つ。特異犯罪の解決と、特異災害の収束。

特異犯罪は呼んで字の如く。特異災害は、異能を持った生命体が自我を失って暴走状態に陥り、極めて危険な環境を作り出してしまったことを指す。

「状況は？」

『駅前で、どこかのペットショップか、でなければ個人の管理下にあったと思われる大型犬が暴走状態で発見されました。通報を受けてハウンドドッグが出動。現在は膠着状態ですが、既に一般人、ハウンドドッグともに被

害が出ています』

「――程度は？　一般人の被害者は大丈夫なんですか？」

『死者は出ていません。一般人の被害者は七名。六名は軽傷ですが、一人――女子中学生の被害者は今後義足が必要になるかもしれません……』

スピーカー越しのその悔しそうな琥珀さんの声に、花音は――

「わかりました。すぐに向かいます。駅前で良いんですね？　現場には被害を広げないようにだけ努めてくださいと伝えてください。事態の収束は私が」

『よろしくお願いします。北口のロータリーです。私も

現場に向かっています。報酬についてはまた後ほど』

それだけ言って、琥珀さんが通話を締める。

花音は静かになったスマホを見つめたまま、深く息を吸い、静かに吐くと――

「……仕事だよ、れー君。市民の安全のためにがんばってみようか」

口元を真一文字に結んでそう言った。

「げんちゃーく」

マウンテンバイクで駅前に乗り付けた花音は、軍人のような装備で身を固めたバスターたち――ハウンドドッグが包囲するロータリー近くで自転車を駐めると、キ

ョロキョロと辺りを見回した。

「発見！　琥珀さーん。ストレイドッグ《れー君と愉快な仲間》、現着です！」

そして見つけた顔に向かって駆けていく。そのコンビ名いい加減止めてくれよ。俺は一切承諾した覚えはない。しかしさすがの琥珀さん、華麗に花音の名乗りをスルー。助かります。

「花音さん――近所とはいえ随分早かったわね」

「そりゃもうかっ飛ばしてきましたから」

バスターの身体能力は一般人を凌駕する。そのバスターの中でも群を抜いたストレイドッグのそれは規格外だ。その上、特に花音の身体能力は凄まじい。その花音が本

気で自転車に乗れば、市街地なら車や公共機関よりかなり素早く移動できる。近距離限定ではあるが。

「で、状況は？」

「対象はロータリーに。今はハウンドドッグで包囲して、数人が念動能力（サイコキネシス）で押さえ込んでいます。特異災害警報を発令し、周囲の一般人には避難していただきました」

仕事モードのスイッチを入れた琥珀さんが、敬語でテキパキと状況を説明する。

「反応晶は確認できましたか？」

「いえ、首輪をしていないようなので……」

反応晶。一九八〇年代、特異体と時を同じくして世界中の鉱山から採掘されるようになった鉱物だ。見た目だ

けなら水晶と区別がつかないのだが、反応晶は特異体が異能を振るう時に観測される精神波（サイコウェーブ）に反応し、発光するという性質を持っていた。それ故の命名である。

その性質から動物の特異体には首輪やタグと一緒に身につけられ、それとわかるように運用されているし、人間の特異体であっても、精神感応者（テレパス）や精神観測者（サイコメトラー）などの人知れず他人に干渉できるような特異体は、能力未使用の証明として身につけている。動物にしても人間にしても、事件を防ぐために必要な措置だ。かく言う俺や花音も、反応晶をあしらったピアスをしている。バスターとして活動する上で、ピアスというのは邪魔になりにくく、都合がいい。

「……相手の能力は判明しているんですか？」

「詳細は不明ですが、念動能力（サイコキネシス）の一種と推測できます。吠（ほ）え声とともに、最大直径五十センチ程の任意の範囲に、瞬間的に超重力を発生させている模様です。上から念動力を叩（たた）きつける感じでしょうか」

「狙撃（そげき）なんかは？　効果なし？」

「四度狙撃を試みました。いずれも超重力で無力化されました」

「なるほどなるほど、それはちょっと厄介ですねー」

花音はうんうんと頷いた。その首肯に合わせて胸元（むなもと）のネクタイが揺れる。今日はフリルの付いたブラウスに赤いチェックのネクタイ、黒いプリーツのミニスカートと

いう出で立ちだ。

どうしてこいつはこうフェミニンというかコケティッシュというか……こんな格好で現場に出るのだろうか。そんな絶対領域が映える格好で飛んだり跳ねたりしたら、見えちゃいけない布が見え隠れするに決まっている。パ……とかショ……とかそういう奴（やつ）が、だ。

……もしかして見せたいのか？　などと考えていると、花音にペしんと頭を叩かれた。

精神感応（テレパシー）もないくせに、ツッコミが的確すぎる。ハイレベルな特異体ほど直感力に優れているとはいえ、こいつはナチュラルに俺のモノローグと会話するから怖ろしい。

それに助けられていることが多いのも事実だが。

「いくられー君でも、現場でえっちなのはいけないと思います」

そんなひらひらの格好で現場に来る奴(やつ)が悪いと思います。

ともあれ。

花音はスタスタと歩き、ロータリーを包囲するハウンドドッグに近づくと、後ろからその中心を覗き見る。

ロータリーの中央で、牙(きば)を剝(む)いたドーベルマンが唸(うな)り声を上げていた。今にも走り出しそうに力を溜(た)めているように見える。しかし実際にはわずかに身を捩(よじ)るだけだ。

数人の念動能力者(サイコキネシスト)に能力で押さえつけられて身動きがと

れないのだろう。

「うーん、一度見てみたいなぁ」

そう呟いた花音は、近くにいたハウンドドッグ――その腰のホルスターに手を伸ばし、するりとハンドガンを抜き取る。

「え、ちょっと――」

「構いません。許可します」

銃を奪われたハウンドドッグが抗議の声を上げかけるが、琥珀さんが先んじてそれを制す。

花音は無言で頷き、ハウンドドッグたちの影に隠れつつ、ドーベルマンに向けて発砲した。

途端。

「オオンッ！」

ドーベルマンが吠え、近くのアスファルトが陥没する。陥没したアスファルトの範囲は、三十センチほどだろうか。ここからでは窺えないが、中心には花音の持つ銃が撃ち出した鉛玉があるのだろう。

ドーベルマンは無傷で、全方位に向け敵意を放っている。

「お見事。暴走状態で狙撃を無力化するってのはちょっと眉唾（まゆつば）だったんだけどな……」

花音は呟いて、銃をハウンドドッグに返す。

「琥珀さん、精神感応者（テレパス）はなんて？」

「効果なし。呼びかけに反応しないと。受け取れる感情

は混乱のみだそうです」

「打つ手なし、か……」

嘆息する花音に、琥珀さんが告げる。

「はい。あとはもう、処分しか……お願いできますか？」

「……わかりました。万が一に備えて範囲網を広げてください」

つまり、用心して距離を取れという事だ。対象の能力に用心して、ではない。花音の能力の余波を受けないように、だ。琥珀さんは頷き、ハウンドドッグに指示を出す。

さぁっとハウンドドッグの包囲網が広がった。琥珀さんもそれに倣い、その包囲網の外側から花音を見守る。

とはいえ巻き添えを食らうほどの戦闘になったりはしないだろう。しかし俺も用心し、琥珀さんの隣で花音を見守ることにした。

離れたところにいる俺を振り返り、花音がぽつりと。

「……れー君の愛が遠い……」

知らねえよ。

「愛とは痛くて遠いもの……大丈夫よ花音、私は耐える女」

「あんたたち普段どんなコミュニケーション取ってるの……？」

花音の演歌の歌詞みたいな独り言に、琥珀さんが俺を疑わしそうな目で見る。琥珀さん、あの馬鹿野郎の戯言（ざれごと）

は聞き流していいですよ。そんで奴の発言の八割は戯言なんで、奴が口を開いても八割は聞かなくていいです。俺なら九割は聞き流す。

「あ、そうだ。れー君お願い！」

花音はそう言って、ロータリーを包囲するハウンドドッグ――その外側にいる俺に向けて、ポケットから取り出したスマホを投げる。何が恐ろしいかって、ちょっと距離があるからと下手投げじゃなく、キャッチボールのようにオーバースローで投げやがったことだ。受け渡すために投げるにしてはちょっと勢いが良すぎるんじゃないか、おい！

胸中で文句を言いながら、俺は投擲（とうてき）されたスマホをな

んとかキャッチ。状況次第じゃこんな事はしてられないし、こいつのスマホのデータは全部クラウドにバックアップがある。だからと言って毎回壊さなきゃならないって事もないもんな。

「ナイスキャッチ！　れー君素敵！　ゴールデンクラブ！」

うるせえよ。サッカーと同じで、野球もルールあやふやなくせに。ゴールデンクラブったって金メダルぐらいに考えてそうだ。

いいから早く仕事にかかれ――そんな想いを込めて睨(にら)んでやると、花音は肩を竦(すく)めてドーベルマンに向き直った。

「……いいですよ。その子――対象を解放してください」

「しかし――」

戸惑いの声を上げたのは、ドーベルマンを能力で押さえ込んでいる能力者の一人だろう。こんなパブリックな場所で解放して良いものか、といったところだろうが――

「構いません。指示通りに」

琥珀さんの声に、数名のハウンドドッグが頷いた。

そして。

「――オオオオオオオオオン！」

見えない力の檻（おり）から放たれたドーベルマンが、咆哮（ほうこう）とともに花音に躍りかかる。これが人ならバーサーカーと

いった様子だ。

対する花音は、全く動じることなく自身の能力を解放する。

「はぁっ！」

ゆるく結んだツインテールが揺れ、花音の体が青白く発光した。体の周りで、ばちばちと放電現象が起こる。

バスターの異能は、ＭＤＣによって観測され、認定される。花音の異能は超能力系に分類される、発電能力（エレクトロキネシス）の亜種。なぜ亜種かと言えば、花音は自身で発電することができない。できるのは、蓄電と、放電のみ。しかもその放電も、能力バトルの電撃攻撃のように、収束・照射できるようなものじゃない。蓄電した電気を全身から放

出するだけ。

しかし、短時間での一対一の決戦なら、花音はどんな特異体を相手にしても勝機がある。それを可能にする能力の使い方を心得ている。

それが今彼女が見せている、全身に青い雷を纏(まと)う能力使用――『雷纏(らいてん)』だ。

本人曰(いわ)く、「絶えず放電と蓄電を繰り返し、全身に超高電圧を纏う私の必殺技だよ！」との事だが、勿論永久機関みたいな便利な技じゃない。

やっていることは言葉通りだろうが、この雷纏モード（能力使用中の花音を、俺はこっそりこう呼んでいる）が短時間しか維持できない事を考えると、放電したもの

を再び蓄電する際にそれなりのロスが出ているはずだ。なので時間経過に従って、蓄えた電気は目減りしていく。そして電気が底をついた時点で、雷纏モードは強制解除。しかも放電と蓄電、相反する力の連続操作で本人の消耗も激しい。そんな欠陥も目立つ大技。

けれど、雷纏はそれらを補って余りある効果を発揮する。

――それは。

「――ぅぅウッ！」

唸り声を上げ、ドーベルマンは方向転換。発光し、バチバチと放電する花音を本能的に恐れてか、進路を九十度転換し、包囲網へと走り出す。

しかし、そうはさせまいと花音は回り込んだ。向かう先に花音の姿を確認し、ドーベルマンは急停止を余儀なくされる。

いくらバスターの身体能力が馬鹿げていて、その中でも花音は群を抜いていると言っても、相手は同じ特異体の動物だ。素の状態では敏捷性じゃ勝負にならない。雷纏モードの効果で花音の身体能力が底上げされた故の結果だ。

以前、花音にこの雷纏モードの身体能力強化について尋ねたことがある。花音の返答は「電気が筋肉をいい感じに刺激してるんじゃないかなー？」だった。

なんとも言い難い回答だが、これがあながち馬鹿にで

きない。特異体の持つ異能については完全に科学の範囲外だ。起きている現象から、無理やり既知の言葉を当てはめているだけにすぎない。

例えば、火を宙空に出現させるから発火能力（パイロキネシス）なんだろう、といった具合だ。真実は何かが燃えている炎ではなく、似たような視覚効果をもたらす高熱のエネルギー波なのかもしれないが、それを証明することはできていないのが実情だ。

花音の纏う雷が雷でなく、電気によく似た特徴を持った身体能力を引き上げるエネルギーだとしても、なんらおかしくはない。

「――ウオン！」

対峙する花音に向けて、ドーベルマンが鋭く吠える。先の銃弾を迎撃した念動能力（サイコキネシス）での攻撃を仕掛けているのだろうが――

……何も起こらなかった。

「オン！　ウオオン！」

続け様に何度も吠える。が、状況に変化は見られない。対する花音は身動き一つとらず、その場で立っているだけ。

雷纏モードがもたらす身体能力強化とは別の、もう一つの効果だ。花音が纏うその雷は、他の特異体の能力を受け付けない。これこそが、どんな特異体を相手にしても勝機を手繰り寄せることができる、花音の本領。

どんな理屈で他者の能力に干渉し、無力化しているかはわからない。それは前述の通り。わかっているのは、花音が雷纏モードを維持できる約三分――その間、彼女は無敵のバスターだという事だ。

一歩、二歩と花音がドーベルマンに歩み寄る。その間も吠え声は続いているが、花音の足は止まらない。

「……ごめんね。キミを処分するよ。そういう決まりなんだ」

切なそうに花音が呟く。特異犯罪者と違い、自我を失い錯乱状態に陥った暴走体には悪意があったとは限らない。しかし一般人に被害が及んでいる以上、特異災害の原因として排除――処分しなくてはならない。

花音とドーベルマンの距離が詰まり、あと一歩というところでドーベルマンが弾(はじ)かれるように飛び退(すさ)った。そのまま花音から逃げようとする。

だが、花音がそれを許さない。飛び退ったドーベルマンを追うように跳ね、一足で追いつくと首のあたりを摑(つか)んで地面に押さえつける。

「――ォオオオオオオ！」

花音の纏う雷に感電し、ドーベルマンが甲高い悲鳴を上げる。特異体ならではの身体能力のせいで、簡単に楽にはなれないのだ。

その苦しむ姿に、花音はそっと告げる。

「……次は、異能の力なんて持たずに生まれてきてね。

きっとだよ」

そして、自身に残る蓄えられた電気を全て放出し、花音は暴走体を処分した。

「……ええ、暴走体は排除されました。いえ、ウチでは対処できませんでした。そのあたりは後で資料を……はい、小泉花音さんです」

暴走体が花音の手によって処分され、特異災害は収束した。琥珀さんが電話で状況を伝える相手は、おそらく彼女の上司だろう。

「ええ、そのように……特異災害警報は解除してください。では」

スマホを操作して通話を終えた琥珀さんが、駅前のロータリー脇（わき）に設（しつら）えられたベンチに座る俺と花音に近づいてくる。

「お疲れ様でした、花音さん。急な要請に応えていただき、ありがとうございました」

まだ周りでハウンドドッグが現場処理にあたっているためか、琥珀さんは仕事モードのままだ。その彼女に、花音がパタパタと手を振って答える。

「いえいえ、お仕事ですから……」

「……本当にお疲れのようですね」

「雷纏を使うとね、やっぱちょっとキツイですねー……」

ベンチでぐったりと項垂れる花音は、長距離走を終えた陸上選手のようだ。肩で息をしながら、顔も上げずに琥珀さんに答える。

「れー君がちゅーしてくれれば、秒で回復するんですけど」

ははは、こやつめ。人前で何寝言ほざいてんだ。ぶっ飛ばすぞ。

「ですって。してあげたら？」

してたまるか。俺は琥珀さんの言葉に首を振って答える。

「あらあら。振られてしまったみたいですよ？」

「れー君のツンデレさんめー……一体いつになったらデ

レてくれるのか……琥珀さん、とりあえず片付いたんだし、敬語はやめてくださいよ」

「まあ、あなたがそう言うなら……」

そう言うと、琥珀さんはきりっとした表情を崩し、柔和な微笑をたたえる。仕事モードからお姉さんモードに切り替えたようだ。

「で、さっき概要は聞きましたけど、なんで駅前でドーベルマンが暴走してるんですか？　成犬みたいだったし、犬種的にも野良犬（のらいぬ）ってわけじゃないですよね？」

「電話で話したように、どこかの施設から逃げ出したか、あるいはお金持ちのお宅で飼われていたかってとこじゃないかしら。急に現れたドーベルマンが、能力で一般人

を襲ったって通報があってね」

……妙な話ではある。

まず、特異体の暴走――特異災害は、そのほとんどが野生の動物によるものだ。愛玩動物や家畜の類（たぐい）は、個人的な交配・繁殖は固く禁じられている。当局の厳重な管理の下、慎重に行われているのだ。ドーベルマンのような血統書付きの犬種なら、間違いなく当局の管理下にあったはず。それが、急に現れた、ってのは……

次に、ドーベルマンが成犬らしかったこと。人間も同じだが、特に動物の特異体の暴走は生まれたばかりで能力をコントロールできず、自我を崩壊させてしまうケースが多い。どんな形であれ能力と折り合いをつけること

ができていれば、暴発はあったとしても、暴走という結果には至らないのがほとんどだ。

そして、その二つはまだしも、これが引っかかるのだが――

「……そうですか。でも、あの子が暴走していたかちょっと疑問なんですよね」

花音が複雑な表情でそう漏らす。

「……と、言うと？」

「あの子は錯乱状態で正気じゃなかったけど、能力そのものは暴走していなかった。きちんと制御していた。そう思えます」

――そうなのだ。俺が引っかかっているのもそこだ。

自我を失い錯乱状態に陥った特異体は、大抵の場合その異能の力をも暴走させる。

しかしあのドーベルマンは、荒ぶり、壊れた精神状態の中で実に理知的に異能の力を振るっていたと思う。自身を狙う狙撃を迎撃するほどの精度で、だ。

通常の暴走体では考えられない。

花音の指摘を受けた琥珀さんは、顎(あご)に指を添えて考え込む。

「……そう、ね。言われてみればその通りだわ。どういうことかしら……」

「や、そこまではわかんないですけど。たまたまって事も有り得ますし」

琥珀さんにそう返し、花音はあっと息を吐く。

「それにしても疲れた……暑い……」

呻く。朝と言っても良い、時間の浅い午前中とはいえ、真夏の太陽の下だ。ベンチを覆う屋根程度では太陽光線に対する防御力は低すぎるし、日差しを照り返すアスファルトは、その熱を蓄える事に一生懸命すぎる。もっとさぼってくれていいのにな。

花音は花音で、ブラウスをきっちり一番上までボタンをとめて、更にオシャレネクタイを締めている。そのネクタイを少し緩めて襟のボタンぐらいは外しちゃどうだとも思うが、花音は外じゃ服を着崩すのを嫌がる。自室じゃだらしないくせに。

まあこいつもこれで女だしな。譲れないものもあるだろう。俺なら極限暑けりゃTシャツ一枚どころか、その裾(すそ)まくって腹を出すまでである。

「それなら、もう帰って涼んだらどうかしら。現場検証はこちらの仕事だし、あなたまで付き合わなくてもいいのよ？」

「……そうですか？　そしられー君が帰りたいって言っているので帰ります……」

おい馬鹿お前なにさらっと人のせいにしてんだよ。自慢じゃないが今回俺見てるだけだったし、まだ全然余裕なんですけど？

……本当に自慢にならないな。

俺が花音をじろりと見ると。

「なにおう？　じゃあれー君は私がここでバターになっちゃってもいいわけ？　パンに塗られて美味しくいただかれちゃっても構わないと？　私、今アイスやソフトクリームなんかでつられたら、知らない男の子にだってついて行っちゃうんだからね！」

こいつ、自分を人質にしてとんでもない脅しを……くそ面倒臭い奴だ。額に『返品』と書いて、箱に詰めていずみ園に送ってやろうか。

「そんなことしたら『こう』だよ」

花音が手をわしっとさせて、恨めしそうに言う。あの手つきはアイアンクローか？　実力行使かよ。体術なら

ともかく、純粋な身体能力なら雷纏モードじゃなくとも分が悪い。花音の握力でアイアンクローなんかされた日には、俺の頭の危険が危なくて大ピンチだ。どんだけ危機なんだよ。

「彼、何も言ってないじゃない」

「れー君の考えてることなんて丸分かりです。あの顔は私をこいずみ園に返品でもしてやろうかとか考えてる顔です！」

琥珀さんの言葉に、花音は俺を何かを摑むような手つきで威嚇（いかく）しながら答える。

……うん。別に炎天下の駅前に長居する理由もないよな。仕事も済んだ事だし。

別に花音の腕力に日和(ひよ)ったわけじゃない。バスターは体が資本だし、熱中症なんかには気をつけなきゃいけないもんな？　だよな？

俺は花音から顔を背(そむ)け、そくさと花音の自転車へと向かう。

「れー君が帰りたいって言っているので帰りますね！」

「あなたがそれでいいなら、私から言うことは何もないわ……」

背後から、そんな会話が聞こえてきた。

途中寄ったコンビニで買い物をした俺たちは、程なく花音の部屋へ戻った。

「ただいまー」

花音がドアノブを回し、無人の部屋に声をかける。先に玄関から廊下へと上がった花音は、はっと気づいたような仕草を見せ、そしてその場でくるりと反転。

にこっと笑い、

「おかえりなさい、あなた。私にする？　私にする？　それともわ・た・し？」

選択肢がねえ。

俺は花音を無視してその脇を通り抜ける。リビングでリモコンを操作し、エアコンに電力を生贄（いけにえ）に冷風を召喚せよと緊急指令を下す。

「れー君が無視する！　ちゃんとどの私にするか選んで

よ！　最初のは私とご飯、二番目は私とお風呂（ふろ）、最後は私百パーセントだよ！」

どれ選んでも結局お前なんじゃねえか。地獄かよ。

湯だった花音の頭を冷やすため、室内の設定温度を下げる。ぴぴぴっとエアコンは応えてくれた。賢い奴は嫌いじゃないぜ。

「あー、地球温暖化とか気にしないわけ？　そんなガンガン冷やしちゃ駄目だよー。っていうか選んでよー」

いや、今の俺には地球温暖化より、お前の脳を冷やすことのほうが重要案件だ。そして俺の選択はアイス一択だよ。コンビニでダッツ買ってきたじゃねえか。

花音の非難の声を聞き流し、ソファの一角に陣取った

俺は、今日の事件を振り返る。

事件そのものは単純な特異災害だ。あの程度の暴走体は、ハウンドドッグには脅威であっても、ストレイドッグ――花音の敵じゃない。

問題なのは、暴走体があの精度で能力を操っていたこと。さっきも花音が懸念（けねん）していたが、自我を失った状態で能力を制御する――そんな事ができるのだろうか。俺は自我を失ったことがないので『絶対にできない』とは断言できないが、少なくともそんな暴走体にお目にかかったことはない。

あのドーベルマンの能力は、琥珀さんが言っていたように念動能力（サイコキネシス）の類だろう。それを限られた範囲に絞り、

上から打ち下ろすように叩きつけていたと思われる。そんな高度な制御を、錯乱状態でやっていたとは考えにくい。

しかし、何度も言うが特異体やその能力なんて科学的に解明されているわけではない。念動能力（サイコキネシス）を制御していたように見えていたが、本当に超重力を発生させる能力で、それを単純に行使していたということも有り得るのだ。

ううむ……能力の正体は、ドーベルマンの素性が明らかになれば判明するかもしれない。そのあたりはハウンドドッグの事後調査を待って、琥珀さんから報告してもらおうか。あれこれ詮索（せんさく）するのは、それからでも遅くは

ない。

まあ、二、三日も待てばあらかた情報は出揃(でそろ)うだろう。何か不審な点があれば、それも込みで事後報告が来るはずだ。

これ以上考えても仕方ないと踏ん切りをつけ、ふと顔を上げる。

正面にはいつの間にか花音が座り、ハーゲンダッツのレアチーズケーキにスプーンを差し込んでいるところだった。いやいや、ちょっと待て。お前がクッキー&クリーム、俺がレアチーズケーキだったよな？

おいおい、間違えたのかよ。こいつ……と思ってテーブルを見ると、そこには空(から)になったハーゲンダッツのミニ

カップが転がっていた。ラベルにはクッキー&クリームの表記。

……お前何してくれてんの？

「れー君難しい顔してるし、いらないのかと思って」

そう言いながら、花音はその手のスプーンを口元へ運び、ぱくっと頬張（ほおば）る。だから待てよお前ああもう半分も残ってねえじゃねえか！

……そうか。そういうつもりか。上等だ。お前がその気だって言うなら、俺だってやり合うのはやぶさかじゃないんだぜ！

俺はソファから立ち上がり、素早くキッチンへと移動。おもむろに冷蔵庫を開け、目当ての物を探しだす。

「はっはー、早い者勝ちだよ、れー君。勝者私！　嗚呼(ああ)、勝利のアイス美味しい……って、何してんの？　まさか！」

リビングから花音の声が聞こえるが、当然無視。俺は発見したソレを取り出すと、一片の迷いもなくかぶりつく。

どたどたと花音が駆けつけてくるが、もう遅い。

「あーっ！　れー君が私のロールケーキ食べてる！　酷(ひど)い！」

今俺が咥(くわ)えているのは、花音が通販で買った有名店のロールケーキ。しばらく前にテレビで話題になった奴だ。

「ちょっと待って！　さすがにそれは見逃せないよ！」

俺の蛮行を止めようと花音が突撃してくるが、ロールケーキを咥えたままひらりと躱(かわ)す。

「ねえ……全部は食べないよね？　半分こだよね？」

涙目で花音が訴えてくる。

はん、てめえどの口でほざいてやがんだ！　早い者勝ちってのはどこのどいつのセリフかもう忘れたのか？

花音に見せつけるように、俺は大急ぎでロールケーキを平らげる。

「ああ！　ああ！　私のロールケーキが……！」

その場に崩れ落ちる花音。見下ろす俺。勝った。

立場って奴を教えてやった。俺は満足してキッチンを後にし、リビングのソファでごろりと横になった。ロール

ケーキ一本って結構重い。お腹(なか)いっぱいです。

第二章　予感

翌々日。正午過ぎ。

今日も青空を支配し、燦(さん)々(さん)と輝く太陽の活躍により、下界は控えめに言ってクソ暑い。

リビングのエアコンは休まずに冷風を錬成してくれているが、家主の要望により室温設定は二十八度。さすがに外に比べれば過ごしやすいが、じっとしていてもじんわりと汗が出る。

「あっつーい……」

脱力しきった様子で花音(かのん)が呟(つぶや)いた。タンクトップにホットパンツ、少しでも涼もうとフローリングの床に寝そべっての発言である。

これで乙女を自称するのだから片腹痛い。

そんな益体(やくたい)もない花音の独り言を聞き流しつつ、暇を潰(つぶ)そうと眺めていたタブレットでネットサーフを続ける。

すると花音がのそりと体を起こし、ぽつりと。

「シャワー浴びて涼んでくる……」

朝から外出もしていないのに、本日二度目のシャワータイム。こいつが乾燥わかめじゃなくて良かった。このペースで水浴びされたら、この部屋が乾燥花音で埋まってしまう。

そんなに暑いなら設定温度下げりゃいいのにとも思うが、冷房を効かせすぎて体調崩したりした日には、体が資本の俺(おれ)たちは飯が食えなくなる。そこら辺の気構えは大したもんだ。

リビングから出ていく際、何かに気づいた花音は振り返り、頭の後ろで手を組むと急に腰をくねらせた。

「へーイれー君。お姉さんと一緒にひとっ風呂(ぶろ)、どうだい？」

褒めた途端にこれだよ……なんでセクシーポーズしてんのに、誘い文句はそんなおっさん臭いんですかね？

俺が馬鹿(ばか)を見るような目で馬鹿野郎を見返すと、

「おっと、れー君の視線がなんだか熱っぽいよ！　これ

はセクシーウェアで悩殺しちゃったかな？　漲(みなぎ)ってきた！」

部屋着にしてる襟(えり)が伸びかけたタンクトップと、ウエストのゴムが緩(ゆる)いホットパンツでそんな事言われてもな……そんで何が漲るんだよ、おい。

俺は無視を決め込んで、タブレットに目を戻す。

「あぁん、れー君冷たい……今なら私の裸が見れるよー……いや待って、一人優雅にシャワーを浴びる私。その肌を叩(たた)く水音に悶々(もんもん)とするれー君……それでたまらなくなったれー君は、バスルームをこっそりと……じゅるり。よしれー君、バスルームのドアちょっと開けとくけど、覗(のぞ)いちゃダメなんだからね！　絶対なんだからね！」

涎を啜って世迷い言を宣う花音。俺はなんでこんな変態とコンビ組んじゃったんだろうなぁ……前世で何かしちゃったのかなぁ……

ため息をついて、右手で宙を薙ぐ。すると、花音の頭上にスポーツタオルが現れた。花音が丸めて枕代わりにしていたそれを、俺の能力――物質転移で転移させたものだ。丸まっていたそれは、落下に際してはらりと広がり、花音の顔に覆いかぶさる。

「ああ！　世界が闇に包まれた！」

花音が悲鳴を上げる。楽しそうだなぁ……

俺の元来の能力は、非常に強力な戦闘特化の特殊能力だ。しかし、ある事件をきっかけに、能力のフルパフォ

ーマンスを使えない状況に陥(おちい)った。それに際し、自分の能力を解明・分析し、なんとかスケールダウンさせた能力を使えないかと苦心した。

結果、無理やり分類すれば俺の特殊能力(ユニークスキル)は四つの要素で構成されているらしい、というところに行き着いた。そのうち三つはどうあっても単独で使用するには至らなかったが、残る一つはなんか制御することができるようになった。

それが、物質転移(アスポート)。離れた場所にある物質を自分の周囲に転移させたり、自分の周囲の物質を離れた場所へ送りつけたりする、マジシャンなら垂涎(すいぜん)モノの能力だ。

転移の有効範囲は視界内で、見えないものを転移させ

たり、見えないところに転移させたりすることはできない。

もともと特殊能力（ユニークスキル）を持つ俺は、この物質転移（アスポート）の制御に成功した時は正直こんなものかと落胆したものだ。しかし慣れてみると実に汎用性が高く、随分と使い勝手がいい能力だと気づいた。サポート型の能力としては申し分ない。

とまあそんなわけで、今はこの能力を活（い）かし、花音のサポートを務めているのだが……

「これは大事件の予感！　闇の世界が来るよ！　大変れー君、フルカラーの世界がモノクロになる前に一緒にお風呂しよう！　サービスするから！」

いらないから。いいからはよ風呂に行け。

「モノクロの私になる前に、フルカラーの私を見よう！鮮明だよ！」

もしもしポリスメン？　変態がいます。

花音はひとしきり騒いで、ようやっとシャワーを浴びに行った。やれやれ。

さて、鬼のいぬ間に冷房を、と設定温度を下げようとエアコンのリモコンに手を伸ばすと、遠くで軽快な着信音が聞こえてきた。

「もしもーし、琥珀（こはく）さん？」

次いで、花音の声。どうやら琥珀さんからの電話のよ

うだ。

花音は琥珀さん――ないしハウンドドッグからの通話は、すべて俺にも伝わるようにハンズフリーモードで受ける。今回もそうしているだろう。俺もスピーカー越しに琥珀さんの話を聞くべく、洗面所に向かう。

『声が反響してるわね……シャワー中？　かけ直しましょうか？』

「やや、お風呂オッケーなスマホなんで大丈夫ですよ」

『ならいいけれど……えー、こほん……先日の特異災害の件、急な要請にもかかわらず、快く引き受けてくださり、誠にありがとうございました』

琥珀さんの仕事モード。美声である。

「いえいえー、被害が拡大する前に片がついて良かったです」

『本当に。お陰様で迅速に警報を解除でき、市民も安心したでしょう。重ねて感謝します。それで件(くだん)の事後調査なんですが、ちょっと妙な結果が出てきまして』

「妙な結果……？」

『ええ。電話ではちょっと憚(はばか)られるので、よければお邪魔させていただいてもよろしいでしょうか？』

「はーい、オッケーです。今日は予定もないんで、是非」

『ありがとうございます。では今から伺(うかが)わせていただき

ます……って、シャワー中でしたね。時間、どうしましょうか？』

「すぐ出るんで、こっち向かってもらっていいですよー」

『わかりました。では後ほど』

「はいはーい」

その花音の言葉に続き、スピーカーから通話終了を告げる電子音が聞こえる。続いて、浴槽（よくそう）の縁かどこかにスマホを置いたのだろう、軽い音。

そして。

「妙な結果、か……」

呟く花音の声には、緊張の色が窺えた。特異犯罪や特

異災害に『妙な結果』なんてものはよくあることだが、敢(あ)えて明言するあたり、なにやらきな臭い匂(にお)いがする。花音もそれを感じ取っているのだろう。

しかし、俺は今、それ以上にとんでもないことに気づいて愕然(がくぜん)とした。

妙に鮮明に声が聞こえるなと思ったら、花音の奴、本当にバスルームのドアちょっと開けてやがるじゃねえか！

これはマズい。非常にマズい。

俺がここにいることに気づかれたら、覗きの疑惑を掛けられる。それで非難されるのならまだ良い。気づいた奴(やつ)が興奮して暴走でもしたら一大事である。

ハンズフリーモードで通話を受けたのは、俺が会話を聞きに来るということを前提にした行動だ。花音も今は琥珀さんの言葉に気を取られ失念しているだろうが、我に返ってこの事実に思い至るのは時間の問題。

最優先の緊急任務が課せられた。花音に気づかれる前に、この洗面所から脱出しなくては！

細心の注意を払い、その場から後退（あとずさ）り――

がちゃっと音が鳴る。踵（かかと）が何かに当たった。なんてベタな失態だ！　慌てて足元を見ると、そこにはヘルスメーターが。何故（なぜ）ここに！　定位置はここじゃないだろう？

「ふっふっふっ、即席の鳴子（なるこ）ってトコかな。来てくれる

って信じてたよ……」

はっと顔をあげると、ぎいいっとバスルームのドアを開け、こちらを窺う花音の姿。その目が怪しく光っているようにも見える。怖い。超怖い。

というか、お前！　自分の姿わかってんか？　裸だぞ！　慎（つつし）みってもんはねえのか！

「ああもう！　……もう！　れー君が私の裸で興奮してるのかと思うと、もうそれだけで漲る！　っていうか滴（したた）る！」

何が!?　ある意味興奮はしてるよ！　命の危険がピンチで危ないからな！　二、三日前にも似たような事言った気がするぞ！

「さあれー君、こっちおいで。一緒にお風呂しよう。大丈夫、なんにもしないから！　ちょっとだけだから！」

ゆらりと、花音が浴室から這(は)うように身を乗り出した。一糸まとわぬ姿で水滴を滴らせて手招きするその様は、俺の目にはまるでパニック映画のゾンビのように見える。っていうか何にもしないっつったよな？　ちょっとするって明言してんじゃねえか！　言葉翻(ひるがえ)すのが早すぎるだろ！

俺は脱兎のごとくその場から逃げ出す。しかし洗面所の出口に至る前に回り込まれた。

バスターである俺の目でも捉(とら)えられない動きだと？

「……じゅるり。さあれー君、諦(あきら)めよう。お風呂しよう。

大丈夫、怖いのは最初だけ……」

はぁはぁと息を荒くして花音が言う。終わった……俺の身体能力じゃ、この局面から逃れることは不可能だ……

これはもう駄目かもしれない。俺は諦めて、そっと瞼(まぶた)を閉じた。

「ねえ……れー君は一体どうしちゃったわけ？」

「夏バテですかね？　ちょっと疲れちゃってるみたいです」

リビングのソファでぐったりと横たわる俺を見て、琥珀さんが目を細めた。

「そう……あなたは随分元気ね？　なんだか肌艶もいいし」

「えっへへー、愛とは自ら摑み取るものだと知りました！」

琥珀さんの問に、満面の笑顔で花音が答える。

その回答に、琥珀さんは俺に向かって目を閉じて、そのまま静かに合掌。いや、まだ死んでないから。

「それで、妙な結果っていうのは？」

「ああ、その件で来たんだったわ」

俺への黙礼をやめにして、琥珀さんはこほんと咳払いし、仕事モードへチェンジ。ブリーフケースから書類を取り出す。

「えー……まずは先日の特異災害の速やかな沈静化、ありがとうございました。こちら事後手続きの書類になります。いつものようにご確認の上、記入をお願いします。報酬のほうは急な要請だった事、可及的速やかに事態を収束できた事などを踏まえ、なるべくご希望に沿う金額をご用意させていただきたいと思いますが、何分こちらにも予算がありまして……」

「わかってますよー。ハウンドドッグの規定通りでいいです。私も、特異犯罪ならともかく、動物の暴走体で儲(もう)けるっていうのは、ちょっと抵抗ありますし」

「ご理解いただきありがとうございます。それではこのくらいで如何でしょうか」

言いながら、琥珀さんは小さな電卓を取り出し、それを叩いて花音に差し出す。

「はい、じゃあそれで」

ちらっとその電卓の数字を覗き見る。数字の後にゼロが五つ程並んでいた。まあ、一流と呼べる腕の花音でも、活動期間は短く実績が少ない。妥当なところだろう。

一瞬で命を落としかねない危険度の高い仕事を請け負うバスター……それも、特に厄介なストレイドッグは、はっきり言って実入りが良い。とても良い。今回は単純な特異災害だったためこの桁（けた）の報酬だが、指名手配されるような特異犯罪者の相手をした場合なんかだと、ゼロが二つ増えることだってある。

「ありがとうございます。二、三日中に口座のほうへ振込いたします。それで、事後調査の結果なのですが……」

「はい。妙な結果ってどういう事ですか？」

「ハウンドドッグの調査班は、まずドーベルマンの素性を洗うため、監視カメラの映像や目撃情報を集め、どこから脱走した特異体なのか特定しようとしました」

あきらかに野生動物と思える個体と違い、先日のアレは一目でそれとわかる血統だった。何処かで管理・飼育されていた個体だろう。それも、異能を持つ特異体。厳重に管理されていたのは間違いないはず。

「まあ、あの子はどこかで飼われていたんだろうし、妥

当な線ですよね。で、どこから逃げてきた子なんですか？」

「わかりませんでした」

花音の問に、琥珀さんは深刻そうに答える。

「目撃情報では確実な証言が得られず、駅構内から現れたのではないか、という情報が多数でして。ですので駅のほうへ問い合わせ、監視カメラの映像を確認しました。ですが、通報のあった時刻から二十四時間遡（さかのぼ）ってチェックしたのですが、映像にドーベルマンの姿は発見できなかったのです。駅員の皆様にもご協力いただいてお話を伺ったんですが、それも……」

そう言って、首を振る。空振（からぶ）りだったというわけだ。

「そのため、駅を中心に範囲を半径五百メートルほどに絞り、聞き込みと、監視カメラの確認をすることになりました。現在のところ、有益な情報はありません」

「それは確かに妙な結果ですね」

ほうっと花音が息をつく。

確かにそうだ。駅構内やその近辺には監視カメラがいくつも設置されている。二つ三つのカメラなら偶然……なんて事もあるかもしれないが、無数の監視カメラの死角をついて――なんて事は考えにくい。

しかし、実際カメラに写っていないとなると……空から降ってきたとしか思えない。

「そこでご意見を伺いたいのですが、あの暴走体がどう

やって監視カメラの目をくぐり抜けたか、何か思い当たる事はありませんか？」

藁にすがるような面持ちで琥珀さんが言う。

例えばあのドーベルマンの能力が念動能力ではなく、本当に重力を操るものだとしたら？　斥力で上空に跳び、カメラの視線を飛び越えて現れたのだとしたら？

……いや、まさかな。だとすれば攻撃手段としてあの擬似超重力だけじゃなく、他の手段も見せていただろう。花音から逃げようとした時だって、そんな素振りは見せなかった。

「あの子、空を飛べたとかって事はないですよね？」

「そういった目撃情報はありませんでした。ないと断言

はできませんが、当方ではその線は考えていません」

「なるほどー……」

花音がうんうんと頭を捻(ひね)る。

「カメラが壊されていたとか、そういう事は？」

「チェックしたカメラの中で、機械的に不調なものはありませんでした」

「そうですかー。私なら変電所襲うんですけどねー。でも暴走体……それも動物がそんな準備するわけないし、そもそも機械的なトラブルがないって言うなら全然的はずれだし……すみません、ちょっと思いつかないです」

「いいんです。こちらも手詰まりで、何かヒントをいただければと思っただけですので。ストレイドッグの花音

さんでも、簡単に思いつかないような事案だとわかっただけでも進展です」

「それって進展じゃないんじゃ……」

「進展ですよ？　ストレイドッグでも簡単に思いつかないような事案なら、相応の分析をしなければならないという事です。それがわかれば、対応するチームを作る事ができます」

　現状解明できないのであれば、解明できそうな人材を集めればいい。そういう事だ。

「今の段階で報告できることは以上です……本当に困っているのよ。足取りを掴めないんじゃ素性も追えないしね。調査班は右に左に大慌てよ」

一通りの説明を終え、琥珀さんは仕事モードからプライベートモードへ切り替える。途端に口調がフランクになるが、花音のようにぐだっとしないのはさすがだ。逆に琥珀さんのような、普段からピシッとしている大人の女性のちょっとだらしない姿とか見たいくらいなのに。

途端、ぱしっと頭を叩かれる。

「？　どうしたの？」

「れー君から邪な気配を感じたので」

訝しがる琥珀さんに、花音が目を細めて答える。その細めた目で見る――つまり、睨んでいるのは、俺。

「なんか私にはデレないくせに、琥珀さんがくるとれー君楽しげなんですよね」

「あら。私、好かれてるのかしら」
琥珀さんはそう言うと、メガネをずらして上目使いで俺を見る。やばい。好き。
「……れー君？　浮気（うわき）は良くないよ？」
花音の抑揚のないそのセリフは、俺に危機感を抱かせるのには十分だった。が、それに反応する前に、むんずと額（ひたい）を掴まれる。
「ましてや愛は掴み取るものだと悟った私の前で……なかなかいい度胸だよ」
いやいや待てお前愛は掴み取るものってこれ物理的に掴んああああああ痛い！
そんな俺と花音のやり取りを見守っていた琥珀さんは、

悪魔の言葉を口にする。

「花音さん。もし予定がないのなら、れー君を悩殺するいい提案があるのだけれど」

「予定なんてないですよなんですかそれ聞きたいです」

食い気味に花音が答える。

「私、本当は今日非番だったのよ。けれど先日の特異災害の件で休日出勤だったのだけれど、花音さんへの報告で今日の予定は終わりなのよね。で、こんなものがあるの」

そう言いながら花音さんがショルダーバッグから取り出したのは。

「そ、それは！　ウォーターパークセイレーンのチケッ

ト！」

「そう。頂き物なんだけれど、一緒に行く相手もいなくて。どうかしら？」

ウォーターパークセイレーン。県下最大のレジャー施設で、屋内外のプールにはそれぞれ趣向を凝らしたウォータースライダー、波の出るプールに流れるプールなど、基本を押さえた造りになっている。その上併設されたアミューズメントモールでは、食事や映画なんかも楽しめる、市街地の外れにある総合施設だ。地元民だけではなく、割りと遠方からも客が来る。

しかし名前がいただけないよな。セイレーンて。波のそうな予感しかしない。出るプールで遊んでたら溺（おぼ）れ

「行きたいです！　……けど、水着がないや……」
「セイレーンの隣の施設で買えるらしいわよ。れー君の視線を独占できるようなのもきっとあるわ」
「うーん……でも、琥珀さんは私となんかでいいんですか？　その、一緒に行くいい人とか」
「こんな仕事してるとね、出会いなんてなかなかなくてね……」
花音の質問に、琥珀さんの表情が曇る。
「ええ？　琥珀さん綺麗なのに……職場恋愛とかないんですか？」
「職場もね……私みたいな管理側の人間は現場には嫌われるし……管理側の上のほうはおじさんばかりだし

……」

げんなりとした様子でこぼす。現場に嫌われるったって、琥珀さんの人となりならそんなの関係ないと思うけどな……逆にそんな事で琥珀さんを敬遠するなんて、ハウンドドッグの若い男はみんなガッツが足りないのではないだろうか。

「皆見る目ないんじゃないですかね？　でもそういう事なら一緒に行きたいです！」

「ありがと。じゃあ行きましょうか。自分の車で来ているから、行こうと思えばこのまま行けるわよ。用意が必要なら、どこかで待ち合わせてもいいし」

あ、あれ？　なんか話が進んでいるぞ。ちょっと待っ

て、俺を悩殺とか言ってたし、俺も行く流れなの？　あれ、俺の意見は？

「いらないよ」

暑い暑いとだれていた花音だが、思いもしなかったウォーターパークへの誘いにテンションも上がって乗り気なようだ。俺の心の声に端的に答えてくる。

いや、でもな？　俺別にそんなに行きたくないんだけどな……拒否権とかないのだろうか。

「ないよ」

……ないかー。やっぱないかー。

でも待てよ？　ウォーターパークに行くってんなら、当然琥珀さんも水着だよな。おお、琥珀さんの水着姿は

ちょっと見たいぞ。大人の色香漂う落ち着いた水着に癒やされたい。逆に超派手な水着だったりしたらそれはそれで大いに高まる。勿論(もちろん)気温が、じゃないぞ。魂の温度が高まる。

「……なんか、琥珀さんと一緒したら逆効果な気がするんですけど」

まだ見ぬ琥珀さんの水着姿にテンションが上がる。そんな俺に、花音は忌々(いまいま)しげな眼差(まなざ)しを向けていた。

「うーみーだー！」

眼前の海を模した波の出るプールに、百メートル級のスライダー……そんな、レジャープールといえばこれ

だ！　っていうランキングの最上位にあるだろう光景を目の前に、花音は両手を広げて叫んだ。敢えて言おう。海じゃねえよ、プールだよ。

「そして美女！」

くるりと振り返り、キメ顔。セクシーポーズのつもりか、腰と胸に手を当てて何やら妙に斜めに立ってポージング。お前がんばりすぎだろ。ふくらはぎがぷるぷるしてるじゃねえか。よく見るとキメ顔もちょっと引きつってるし。

「どう、れー君？　私綺麗？」

聞き方。聞き方気をつけて？　その聞き方は怖いよ？

しかし癪（しゃく）にさわるが、確かに花音は綺麗だった。

顔の造形は言うまでもない。おそらく誰(だれ)に聞いても美女か美少女だと答えるだろう。美女か美少女か、どちらと答えるかは聞いた相手の年齢によると思う。

白いビキニには、各所にフリルとパステルブルーのハイビスカス柄があしらわれていて、健康的な花音の肢体を彩(いろど)るのに過不足なく――つまり、良く似合っている。特にそのハイビスカス柄は、南国から連想させる夏のイメージと華やかさを醸(かも)し出(だ)していた。

つうかこいつ、普段はぐうたらしてるくせして、体はきゅっと締まってるんだよなー。出るべきところは出てるし、しかも出すぎておらず、足りなくもなく……美乳というか、需要的に最大公約数というか、なんというか

……それでいて筋肉質ってわけでもない。女子っぽくて柔らかそうってちょっと待て、なんで俺は花音なんかを真剣に見てんだ？

……まあ、認めざるを得ないよな。はっきり言って文句の付けどころがない。

だけど、俺はこいつの普段の醜態見てるからな……新鮮ではあるけれど、今一つこう響くものがない。離れて見る分には美人なのに、なんて残念な女なんだ……

そして文句の付けどころがないと言えば、並び立つ琥珀さんも同様だ。

見事なプロポーションを誇るその体に纏(まと)った黒いビキニは白い肌を輝かせ、腰に巻いたレースパレオは露出を

減らしているのによりセクシーさを演出している。その姿は面向不背（めんこうふはい）、仙姿玉質（せんしぎょくしつ）――いや、どれだけ言葉を重ねても、琥珀さんの美しさを形容することはできまい。天女がいたら、きっとこんな感じだ。

その琥珀さんは少し恥ずかしそうに身を捩（よじ）らせていた。一回り近く年の離れた花音と比べられないか気にしているらしい。その仕草が、琥珀さんの大人の色気に可愛（かわい）らしさを加味している。まさにパーフェクトエンジェル。やばい。好き。結婚したい。

そんな二人がプールサイドにいるわけだ。当然目立たないはずもなく、

「おい、見ろよ……すげえ美人じゃね？」

「姉妹かな？　二人共レベル高すぎでしょ。どんだけハイレベルだよ」

そんな声が周りから聞こえてくる。しかし一方で、

「ちょっと、どこ見てるのよ」

「何、胸が大きい人だったら誰でも良いわけ？　おっぱいと結婚する？」

と、自分のパートナーを責めるような女性の声も聞こえてくる。いや、正直仕方ないと思うよ？　女子だって、細マッチョの超イケメンがいたら目がいくだろ？　ブーメランパンツでプールサイド歩いてたらついつい見ちゃうだろ？　そういう事だよ。

それはともかく。

周囲のそんな賞賛ともとれる声などどこ吹く風で――聞こえてないはずはないのだが――花音が琥珀さんの手を引く。

「見てくださいよ、あれ！　絶叫スライダー！　最大傾斜四十度！　やばいです！　その名も奈落フォール！　行きましょう！」

「……ウォータースライダーで四十度ってほとんど落下じゃないの……？」

はしゃぐ花音にたじろぐ琥珀さん。しかしこのパークの命名者のネーミングセンスは一体どうなってんだ。セイレーンで奈落に落ちるって不吉すぎるだろ。

付け加えると、屋外の螺旋（らせん）状のスライダーの名称はメ

イルストーム。おそらくノルウェーの大渦潮のメイルストロムをもじったのだろう。中々ロックな感性だ。命名者は来場者に何か恨みでもあるのか。

「さぁさぁ、行きますよ琥珀さん！」

「私絶叫ものはちょっと……」

「何言ってるんですか？　そんな事でコンクリートジャングルを生き残れると思ってるんですか！　琥珀さんもバスターでしょう？」

「確かに現場を退い(しりぞ)たとはいえ、私もバスターには変わりないけど……」

圧倒的ハイテンションで琥珀さんを絶叫スライダーへと導く花音。正直ウザい。対してそれに動揺する琥珀さ

んはもじもじしてて可愛い。花音とのコンビ解消したら、琥珀さんハウンドドックやめて俺とコンビ組んでくれないかなぁ……

などと考えた瞬間、花音の動きがピタリと止まる。あ、これあかんやつや。いやいや花音とコンビ解消とかほんと有り得ないから。未来永劫（みらいえいごう）コンビだよ？　もうコンビと言ったら花音と俺。ウサギとカメ、狼（おおかみ）と赤ずきん、継母（ままはは）とシンデレラ……

「……れー君。少し、頭冷やそうか……」

説得失敗。逃げ出そうとする俺の目の前に、白いビキニを纏った悪魔がずいっと立ちふさがる。そのすらりとした脚が大きくしなり――

そのまま思い切り蹴飛ばされた俺は、頭からプールに落ちて盛大な水柱を上げた。

監視員にしこたま怒られたのは言うまでもない。

「あのねぇ、花音さん。れー君に好かれたいのでしょう？　蹴飛ばしちゃ駄目じゃない」

「だってだって、れー君が琥珀さんとコンビ組みたいとか考えてて……」

監視員から解放された後、屋外のパラソル下に場所を移し、今度は琥珀さんが花音に説教をしていた。

「……仮にそうだとしても、そこで暴力に頼ったら逆効果でしょう？　気持ちが離れたらどうするの。もっと別

の手段があるでしょうに」
「別の手段？」
「そうよ。あなたも女の子なんだから、そういう戦い方の一つくらい、少し考えれば思い当たるでしょ？」
「戦い方……はっ」
花音は琥珀さんの言葉を繰り返すと、何かに気づいたように顔を上げ、胸の前でぱんと手を叩いた。そのまま両手を広げ、
「へーイ、れー君。花音お姉さんの熱い抱擁、受けたくはないかい？」
そんなあからさまなハニートラップに誰がひっかかるんだよ。方法が直接的すぎるだろ。

「ウェルカム！」

行かねえ。

「またまたぁ。ユアウェルカム」

行かねえってば。あとそれ「あなた、きて」ぐらいのつもりで言ってるんだろうけど、ユアウェルカムの日本語訳は「どういたしまして」だから。お前は誘い文句だと思ってるんだろうけど、壮大な勘違いだから。

とにかく、この馬鹿に付き合っても疲れるだけだ。無視を決め込もうとした――その時、周囲が騒がしいことに気がついた。

「……何か、騒がしいわね」

呟いたのは琥珀さんだ。しかし騒がしいとは言っても、

琥珀さん（とついでに花音）の思わず目を奪われてしまうビジュアルを褒め称えるようなものではない。

耳をすますと。

「猿……猿だよね、あれ」

「なんでこんな所に……」

そんな声が聞こえてくる。

はっとした俺は、反射的に花音を見る。花音も俺と同様、その会話を耳にしていたようだ。鋭く視線を巡らせ――そして、それを視界に収める。

猿。あまり大型ではない。ニホンザルに見える。レジャープールにはあまりにも異質な存在のそれは、周りの奇異の目など一切（いっさい）気に留めず、流水プールと競泳プール

の間に佇(たたず)んでいる。
外壁を乗り越えて入り込んできたという感じではない。まるで最初からそこにいたかのように、プールサイドの一角にいた。
瞬間、先日のドーベルマンが頭をよぎる。この辺りに動物園なんてないし、野生のニホンザルが出没するような環境でもない。
「――琥珀さん！」
「――！　N市ハウンドドッグ・白坂(しらさか)琥珀です！　特異災害の可能性がありますー！　市民の方は、静かに、落ち着いてゆっくりと猿から離れてください！」
花音の叫びに反応し、琥珀さんがよく通る声で周囲に

避難を促す。

「走らないでください！　猿を刺激しないように、急に動かず、ゆっくりと！　目を合わせても駄目です！」

混乱に陥りかけるプール客に、花音と琥珀さんが注意を喚起する。

「ストレイドッグ・小泉（こいずみ）花音です！　慌てずに、歩いて離れてください！　ゆっくり、ゆっくり……刺激しないようにお願いします！」

内心、花音も琥珀さんも気が気ではないだろう。こんなに人が多い場所で特異災害が起きたとなれば、確実に被害者が出る。だがそれを表に出さず、二人は穏やかな表情で、ざわつく客を誘導していた。

避難誘導は二人にまかせ、俺は猿の様子を観察する。何かを探すようにきょろきょろしている。こいつが特異体かどうかは別として、しばらくこれを続けてくれれば客の避難もスムーズに済むのだが……

――と。

のそり、のそりと、猿はまるで幽鬼のように流水プールに向かい、歩き出す。

「きゃあああ！」

今まさにプールから上がり、逃げようとしていた客が悲鳴をあげる。花音がぎくりとして振り返るが、猿は特に気にした様子もなく、ふらふらと歩き続ける。

近づいてくる猿に怯え、周囲の客が駆け出した。恐怖

が伝搬し、あちこちで悲鳴が上がる。

「なんてこと――君、プールのスタッフね？　場内放送！　落ち着いて避難するように案内して！　屋内にお客さんを収容したら、なるべく建物の中心に！」

「は、はいっ！」

琥珀さんが逃げ惑う客の中から監視員らしき人物を見つけ、指示を出す。たちまち混乱の坩堝（るつぼ）と化したこの状況でどれだけ効果が期待できるかわからないが、それでもしないよりは全然マシだ。

猿はそのままプールの脇（わき）へと進み、水を飲もうとでも言うのか、水面を覗き込む。

そして――

「ギィィィィィイイイイイイッ！」
　絶叫。静かに歩いていた猿は急に荒ぶり、声帯が破れそうなほどの暴力的な咆哮(ほうこう)を上げる。同時に、穏やかに流れていたプール——その水面が盛り上がり、水柱が立つ。さながら逆流する滝のようだ。
　間違いない、特異体だ。それも、水流操作(アクアキネシス)——プールという環境を考えれば、これ以上はない最悪の組み合わせ。
「！　れー君！」
　叫び、花音が駆け出す。言われて気がついた。水竜のごとき水柱に、確認できるだけで二人——逃げ遅れた客が飲み込まれている！

「っ！」

一瞬遅れ、琥珀さんも水柱に向かって駆け出す。二人で客を救出しようという算段のはず。なら、俺がすべき事は――

その場で周囲を見回す。目に留まったのは、プールの監視員が座る監視台。太めのパイプ製で、そこそこ重量もありそうだ。それを、異能を振るう猿の頭上に転移させる。

俺の意志に応じて宙空に転移した監視台は、重力に従って猿の脳天を打ち据えた。鈍い音を立てて、猿を下敷きにそのままプールサイドに落下する。

「ギィアッ！」

相手は特異体――いや、暴走体だ。大したダメージがあるとは思えない。それでも不意をついたことで、猿は著しく集中を乱し、異能のコントロールを失った。ばしゃりと大きな音を立て、隆起した水柱が弾(はじ)ける。

「ナイスれー君！　愛してるっ！」

水柱から放り出された二名の客を、駆けつけた花音と琥珀さんがそれぞれキャッチ。よし、これであの二人は救出できた。後は客が逃げるまで足止めできれば――

獲物を横取りされたとでも思ったか、暴走体は監視台を跳ね除けて、ギロリと花音に視線を向ける。今度は俺が駆ける番だ。弾けた水が豪雨のように降(ふ)り注(そそ)ぐプールサイドを走り抜け、花音を背中にかばう形で猿の正面に

躍り出る。

「れー君！　三十秒、お願い！」

それだけ時間を稼げば、あ
る程度客を逃がせるって事
だな？　任せろ！

真っ直ぐに暴走体を睨みつ
ける。交錯する視線。その
濁った瞳に理知的なものは見
えない。わかったのは、花
音から俺に標的を変えたらし
いということだけ。

逃げ惑う客の喧騒の中、降
り注いでいた水が止んで

「ギィィィィァァァァァァッ！」

再び咆哮。猿の足元の水溜
まりから、ムチのような水
塊が頭をもたげる。水柱が水
竜なら、このムチは水蛇と

いうところか。

距離はそう離れていない。

蛇の一撃を反射神経だけでなんとか躱(かわ)し、距離を稼ぐ。

周りが水だらけのこの場所は、奴の狩場も同然だ。

対して俺の物質転移(アスポート)は生物に干渉できない。攻撃手段は物質を落下させての物理攻撃くらいだが、いくら暴走体とはいえ、何度も同じ手は使えないだろう。

だが、何も俺が仕留める必要はない。時間を稼げば、花音がどうにかするだろう。

猿は周囲の水を自在に操り、ムチ状の一撃を、あるいは水弾を撃ちだして次々と攻撃を仕掛けてくる。だが、相手はやはり暴走体。単調で本能的な攻撃だ。避けるた

びにプールサイドのコンクリートが砕けるのを横目に、距離を保って躱し続ける。

やがて。

「お待たせっ！」

受け止めた客を逃してきた花音が駆けつけてくる。猿を挟んで俺と琥珀さんも続いて、花音の横に並ぶ。

「ウギィ……」

二人の気配を察したか、特異体は俺から目を離し、花音と琥珀さんに向き直る。その隙（すき）に、すかさず地面に倒れたままの監視台を再び転移。猿の頭上に現れた監視台は、先と同じように脳天めがけて落下する。

だが、それは暴走体の想定内だったらしい。横に飛び、あっさりと監視台を躱す。そして改めて身構えて、そのまま飛びかかるか、また水を操って攻撃か――反撃の姿勢を整える。

しかし、だ。こっちだってそれくらいはしてくるだろうと予測している。

「――琥珀さんっ！」

「！　っ！」

俺の意図をいち早く察知した花音が叫ぶ。琥珀さんも察してくれたようだ。呼気とともに虚空（こくう）に手を伸ばすと、プールサイドにバウンドした監視台が、ダンプに轢（ひ）かれたかのように猿に向かって弾け飛んでいく。琥珀さんの

念動能力（サイコキネシス）だ。不可視の力で射出された監視台が、一直線に暴走体へと襲いかかる。

「イギャアッ！」

自由落下より遥（はる）かに速いスピードで飛来するそれに反応できず、猿は為（な）す術（すべ）もなく打ち倒された。その時にはもう花音は駆け出している。

「オッケーです！　後は、私が！」

プールサイドを滑るように駆け抜け、花音は猿に組み付いて――

「ギャアアアアアアッ！」

鈍い音と、悲鳴が響く。暴走体の肩を外したようだ。

動物虐待――ではない。こいつは異能の力で人を襲った。

俺たちが居合わせなければ確実に死者が出ただろう。特異災害を引き起こす暴走体は処分しなければならない。

花音はそのまま外した腕を掴み、猿を引きずってプールの外壁に駆けていく。周囲に水がばら撒かれたせいで、ここで放電攻撃を行うわけにはいかない。伝導体の水を伝って客や施設にダメージを与えかねないからだ。プールの敷地外に出て止めを刺すつもりだろう。

暴走体はその間も抵抗し、プールサイドに溜まった水から水弾を打ち出す。しかし花音はそれすらも振り払い、外壁を蹴って空中へと飛び上がった。

「……――……」

呟いた言葉は手向けのものか、それとも懺悔のそれか。

ここからでは聞こえない。花音は何か言葉を残し、猿の手を掴んだまま、空中で紫電を纏った。

「ドーベルマンの件もまだ片付いていないっていうのに……」

ハウンドドッグを出動させて一通りの現場検証を終えた後、セイレーン内にあるレストランの一角で琥珀さんは頭を抱えて言った。

ちなみに未(いま)だ水着のままだ。組んだ脚が艶(なま)めかしい。

「いやはや、お陰様で被害も最小限で済みましたし、お客様に重傷者も出ませんでした。本当にありがとうございます」

これは同席しているセイレーンの社員さんの言葉だ。ネクタイを締めたいかにもな中年の男性で、花音と琥珀さん――ついでに俺に、何度も深く頭を下げる。首に下げた社員証には管理責任者という肩書と、中西（なかにし）という名前が記されていた。

「いえいえー、特異災害の対処は私たちのお仕事なんで。おっきな怪我（けが）した人いなくて良かったです」

花音が営業スマイル全開で答える。

あの猿の異能が水流操作（アクアキネシス）だと気づいた時には背筋に冷たいものが走ったが、幸い被害者のほとんどは避難の際に転倒し、捻挫（ねんざ）や擦過傷（さっかしょう）を負ったぐらいなもので、骨折やそれ以上の怪我人は出なかった。水柱に飲まれた二人も救出が早かったのが幸

いし、特に後遺症などは見られないようだ。こんなレジャー施設で特異災害が起こり、重傷者がゼロというのは僥倖（ぎょうこう）と言える。

「申し訳ありませんが、お客様方への謝罪や説明等ありますので、私はこれで一旦（いったん）席を外しますが……」

「ええ、わかりました。後日必要があればハウンドドッグまでご連絡ください。私は白坂琥珀と言います。口頭で申し訳ありません。何分こんな格好なので名刺がなくて……」

「白坂様ですね、重ね重ねありがとうございます。では……」

そう言って中西氏は席を立ち、テーブルから離れていく。

十分に彼が離れた後、琥珀さんがげんなりとした表情で言った。

「はぁ……動物の特異災害が続くなんて気が重いわ。管理体制の見直しが必要かしら」

「ニホンザル……動物園は距離があるし、ここら辺にもいるんですかねー？」

この辺りはそれなりに都市開発が進んでいる。勿論郊外は自然が残っている地域もあるが、それにしても人の手が入っていない区域などはごくわずか。野生動物から特異体が出現することはまあるとはいえ、全国的に見れば頻度（ひんど）はそれなりに低い部類のはずだ。先日に続いての動物の特異災害は、正直予想しづらい事態だ。

「……とにかく」

琥珀さんは、そう前置きを入れて、

「こほん。えー……今回の特異災害において、迅速な対応感謝いたします。現場に居合わせたという事でバウンティになり、報酬は規定のものになります……ですが状況、被害者の数、早期収束を考慮しまして追加報酬を検討させていただきます。精査結果を追って連絡いたしますので――」

「……仕事スイッチ入れるの、大変じゃないですか？」

「柄じゃないけど、人目もあるしそれっぽくは振る舞わないとね……えー、追って連絡いたしますので、詳細は後日、ということでよろしいでしょうか？」

「よろしいです！」

びしっと敬礼をして、花音はあやしい日本語で答える。

バウンティとは、ストレイドッグの仕事の形態の一種だ。

ハウンドドッグから直接依頼を受ける仕事とは別に、ストレイドッグが能動的にパトロールをし、特異犯罪者を確保したり、特異災害を未然に防いだりした際、それに見合った報酬が得られるというシステム。俺たちは琥珀さんから仕事を回してもらえるためそれほど積極的にやらないが、駆け出しのストレイドッグなんかにとっては貴重な収入源であり、経験も積めるという都合がいい仕事と言える。

ただし、依頼される仕事に比べると額はいくらか下がる。

「ありがとうございます。ではそのように……それにしても、実戦で能力を使ったのは久しぶりよ。現場を退いて以来だったけれど、足を引っ張らずに済んで良かったわ」

スイッチをオフにして、琥珀さん。何かを確かめるように、自身の手を眺めて言う。

「いやー、ホント琥珀さんいてくれて良かったです。ナイスアタック！」

「私じゃなくて、れー君の機転とあなたが声をかけてくれたお陰よ」

「そんな事ないと思いますよー？　私は遠隔攻撃の手段ありませんし、そもそもあの状況じゃ雷撃は使えなかったし、れー君も生き物には干渉できないし……琥珀さんがいなかったらどうなってたか。現場に戻ってもやれるんじゃないですか？」

「まさか。あれで精一杯なのよ？　アタッカーとしては不十分だわ。力不足を痛感して事務方に回ったんだから」

この身で受けたわけではないが、見たところ琥珀さんの念動能力（サイコキネシス）は中の下か、その下か……ハウンドドッグの現場部隊が務まらないレベルではないと思うが、それには本人の強い意志も必要だろう。

琥珀さんの年齢ならここから急激に能力が伸びる事もないだろうし、その気がないのなら現状――事務方がいいんじゃないかと思う。

「まあ、人材不足で現場指揮に駆り出されたりもしてるけれどね」

「現場指揮は向いてると思いますよー。状況判断早いし。それに、琥珀さんの指示ならみんな聞きますよ。聞きまくりです」

それな。ほんとそれ。だって琥珀さん美人だし。いや美人なんて言葉じゃ琥珀さんの美しさは表現しきれない。超美人。もしや琥珀さんの正体は地上に降臨した女神なのでは……？

琥珀さんが上司になるなら、俺もハウンドドッグに戻ってもいいかもしれない。

「それは許さないよ」

ばしんと頭をはたかれた。痛いです。

「……それでも、こんなペースで特異災害が続くなら、むしろ現場で体使う方が楽かもしれないわ。仕事が仕事なだけに現場で動ける人材は揃っているけれど、事務方は常に人材不足だし……これで私、またしばらく休み取れないわよ……」

琥珀さんが呻くように言い、ずるずるとテーブルに突っ伏す。今後のスケジュールを憂いた発言だろうが……その憂い顔も素敵です。

ところで。

フラグって言葉がある。最近のサブカルに触れていれば言わずと知れたって奴だ。強大な敵に攻撃した後の「やったか？」はやってないフラグ、戦争中の兵士の「俺、この戦争が終わったら結婚するんだ……」という台詞（せりふ）は死亡フラグ。

はてさて。

「まぁまぁ琥珀さん。動物の特異体が人を襲うなんてそうそう起こる事でもないし、それが二件続いたんですから、きっとしばらくは何も起きたりしませんよ」

この花音のセリフがフラグな気がしてならないのは俺だけだろうか。

結論から言えば、予想通りこれ以上ないってくらいのフラグだったよね。誰かこの馬鹿野郎が迂闊（うかつ）なことを言わないように口塞（ふさ）いどいてくれねえかな。

◇

◇

◇

――夢だ。俺は考えるまでもなく、そう判断した。

なぜなら目の前に広がる光景は、もう既に何度も夢に見ているものだったから。

しとしとと雨が降る夜。

水溜りに足を取られ、体勢を崩した女性。

少し離れた所にいる男が、女性に向けて手のひらを突

き出す。すると、その先――何もないはずの空間が歪(ゆが)んで見えた。目の錯覚だったかもしれない。

それでも嫌な予感がした俺は、咄嗟(とっさ)にその歪みと女性の間に割って入り――

◇

◇

◇

はっと目を覚ます。知らず呼吸が乱れていた。

「――れー君、大丈夫？」

花音が俺の体を揺すっていた。どうやらうなされていた俺を起こしてくれたらしい。

ムクリと体を起こした俺は、猛烈な喉(のど)の乾きに気がつ

いた。そのまま立ち上がってキッチンに向かう。

「暑いからねー、うなされちゃったかな」

花音が目を細めて言った。その声色（こわいろ）の柔らかさに安心感を覚える。俺も現金なものだ。こいつがいつもこんな調子なら籠絡されてしまう日も近いかもしれない。まあ花音がこのペースを保てるわけがないので、しばらくは平気だ。

セイレーンでの一件から一週間。今日は特に仕事の予定もなく、俺たちはリビングでダラダラと過ごし――そしていつの間にか寝てしまったらしい。花音が言うように暑さで寝苦しく、あの夢を見たのかもしれない。

あの日も日中が猛暑で、日が落ちてもなかなか気温が

下がらなかった。
喉を潤し、頭を振る。今考えても仕方のないことだ。忘れようと思って忘れられることでもないが、今は一旦思考の外へ追い出しておこう。
さて。
気持ちを切り替えてリビングに戻ると、花音が待ってましたと口を開く。
「ねえ、れー君。気分転換ってわけじゃないけど、駅ビル行かない？　コーヒーショップでフラッペ食べようよ。アイスの買い置きもないしさ。フロートでもいいよ！」
駅ビル……駅ビルなぁ……面倒くせえなぁ……
俺の反応が良くないと見るや、

「ヘーイ、少年。お姉さんとサ店でお茶しない？　おごっちゃうゾ」

妙に時代を感じるフレーズで言い直した。お前いくつだよ。その誘い方は昭和（しょうわ）のそれだ。

っていうかマジか。この暑さでわざわざ外にでかけようってのかよ。いくら目的が氷菓だっつったってお前、正気か？　冷房効かせてゴロゴロしてた方が楽だろ。

「それが嫌なられー君と一緒に冷水お風呂タイムっていうのがあるんだけど……れー君はおでかけとお風呂、どっちがいい？」

馬鹿お前なにのんびりしてんだよ。きりきり用意しろ。置いてくぞ。

「……れー君はお風呂が嫌いですにゃー」
口を尖(とが)らせて、花音。部屋着から着替えるために服を脱ごうとする。
俺は慌ててリビングから退散した。

先日のような出動とは違うので、普通のペースでマウンテンバイクを走らせて十数分。
駅についた俺たちは、駐輪場にマウンテンバイクを停めて駅ビルの一角――コーヒーショップへと向かっていた。
いたのだが――
店に入れそうにない。

ビル内に入ったまでは良いものの、肝心の店舗前――広くとってある通路は、人だかりができていた。何やら騒がしい。

「なんだろ。人多いねー……はっ、まさかこの国民的アイドル小泉花音の来店を察して日本中のファンが駆けつけて出待ちを？　困っちゃうなー……並んで！　サインは並んで！」

人だかりを目にした花音がそんな事を言う。今日の花音のファッションは、モノトーンに軽めのゴシック色を取り入れた感じだ。アイドル路線に見えなくもない。が、アイドルはお前みたいに変態じゃない。アイドルに謝れ。

あとそれ言うなら出待ちじゃなくて入り待ちだから

な？

しかし本当に人が多いなる。なんかイベントでもやってるんだろうか。

どうしたものかと人だかりを眺めていると、モーゼの十戒（じっかい）の如（ごと）く人垣が割れて、その中心からひょこひょこと歩み出てくる小動物。

銀灰色の人気者、猫……アメリカンショートヘアだった。

「オーゥ、キャット！」

どんなキャラのつもりなのか、その猫を見た花音がカタカナ英語でそう言った。しゃがみ込んで、猫目線でにゃーだのふにゃーだの言って手招きをする。

が、猫は花音をガン無視。キョロキョロと首を振っている。自身を囲む人だかりを気にしているように見えた。

「……愛が遠いデース……」

無視された花音が呟く。だから何キャラなんだよ。

「ま、見て品種わかるようなにゃんこがこんなトコにいるのは怪しいよね。ここってペットショップあったっけ？　逃げてきちゃったのかな？」

ショッピングモールならまだしも、駅ビルだからな。駅ビルにペットショップはなかなかレアケースじゃねえか？　となると――

「……まさかとは思うけど、この子も特異体だったりするのかな？　わんこに猿……あれからまだ一週間だよ？

そうそう動物の特異体が事件起こしたりしないよね……？」

花音も俺と同じ考えに至ったらしい。口元を引きつらせて問いかけてくる。

ああ、そうだな。ただしお前がそんな事を言い出したりしなければ、だ。もうこいつが口に出した時点でフラグが立っている気がする。

銀灰の猫を確認する。首輪をしているようには見えない。首輪に反応晶があれば特異体で確定だが、ないから特異体ではない事の証明にはならない。と言って特異体ではない事の証明にはならない。

事実、あの件のドーベルマンも、首輪も反応晶もなかった。

「……どうしよっか？」

周囲に混乱を招かないように気を配ったのか、花音が小声で問いかけてくる。周りでは「可愛い」だとか「迷子かなぁ？」だとか、そんな声が聞こえてくる。ただ可愛い迷い猫であればいいのだが、ドーベルマンやニホンザルの件を考えると、どうしても身構えざるをえない。

確保――いや、保護してハウンドドッグと連携して特異体か普通の猫かを確認、その後に然(しか)るべき対処を……ってところか。

ただの迷い猫ならちょっと窮屈な思いをさせてしまうかもしれないが、特異体の可能性が否定しきれない以上、一般市民の安全が最優先だ。

花音に視線を送ると、わかったと言わんばかりに頷(うなず)いてみせた。その場にいる一般客に向けて声を張る。

「みなさーん、私はストレイドッグの小泉花音と言います。この中に、猫ちゃんの飼い主さんはいらっしゃいますかー？」

確認の言葉に、名乗り出るものはいない。

「いませんねー？　この猫ちゃん、首輪をしていなくって、特異体かそうでないか判断できません。念のため当方で保護しますんで、みなさんちょっと離れてもらっていいですかー？　今のところ危険はなさそうなんで、慌てずに、ゆっくりと……そう、ちょっとずつ下がってくださーい」

花音が客に指示を出し、そうとは意識させずに避難させている間、俺は銀灰の猫を注意深く観察する。離れていく周囲の人間に戸惑っているものの、今のところは大人しくしているように見えるが……

客たちが一定以上離れた頃合(ころあ)いを見計らい、花音がぺろりと唇をなめる。

「にゃんこ捕獲大作戦、スタートだにゃー。れー君の愛を捕まえるリハーサルだと思えば気合も入りまくりだよ！」

猫を捕獲したところで俺の愛は手に入らないと思います。

隣に立つ相棒に恐怖を感じていると、当の花音はすっ

と身を低くした。猫の視線に合わせるためではない。全身のバネを使って飛びかかるためだ。彼我の距離は四、五メートル。あの猫が特異体だとしても、花音なら取り逃す距離じゃない。

周囲の視線が花音に集まる。

「――よっ、と」

そんな気の抜けそうな掛け声で、花音はセラミックタイルの床を蹴った。一歩目で加速、二歩目で距離を詰め、相手にリアクションを取らせることすらなく、両手ですくい上げる。

わっ、と周囲から歓声が上がった。

「やや、どうもどうも」

猫を抱き、歓声に応えつつ花音が戻ってくる。花音の胸に抱かれた猫は、驚いたのか興奮気味ではあるが能力を使うような気配はない。特異体かもしれないという懸念（けねん）は杞憂（きゆう）に終わったが、俺たちの立場上、一般客に危険が及（およ）ばなかったのがなによりだ。

あとは念のためハウンドドッグに引き渡し、特異体かそうでないかの検査をしてもらえばいい。その後は特異体であってもなくても、ハウンドドッグが管理元を探すことになるだろう。

花音が口を開く。

「やー、居合わせたのが私たちでほんと良かったよ。他のバスターじゃ被害が出たかもねー」

……んん？

「この子、特異体だよ。発電能力（エレクトロキネシス）。今もバチバチやってる。全部吸収して蓄電してるけど……こんな商業施設で発電能力を暴走させたら、ちょっと洒落（しゃれ）にならないよね」

落ち着かせようとしているのか、花音が猫をあやしながら言う。

発電能力者（エレクトロキネシスト）は花音にとって天敵であり、同時に最も楽な相手だ。相手が卓越した特異体なら雷纏（らいてん）の雷をコントロールされる恐れもあるが、対して相手の電気を蓄電という形で全（すべ）て無効化できる。そしてフィジカル勝負なら、花音に勝てる奴なんてそうはいない。

どうやらこの猫はその発電能力者（エレクトロキネシスト）で、今もその能力を振るっている……らしい。花音が蓄電でその電気を吸収・無効化しているせいでそうは見えないが。

今回は、特異災害を未然に防いだってことになるのか？　運が良かった。

それにしても、これで特異災害が十日ほどで三件発生したことになる。はっきりと記憶しているわけではないが、確かこの辺りの動物による特異災害発生件数はひと月あたり二件を割っていたはずだ。十日で三件は多すぎる。

また琥珀さんが頭を抱えそうだ……なんて軽口では済まない。

俺の中で、とある疑念が頭をもたげた。

通報を受け、ハウンドドッグのバスターと、特異体を移送する特殊車両を伴って琥珀さんが現れた。一週間前のセイレーン以来だが、その表情は疲労の色が濃く、覇気もない。

「……助かったわ。相手が発電能力者（エレクトロキネシスト）なら、花音さんほど適任もいないわよね」

仕事モードに切り替える気力もないのか、その口調は普段のままだ。

「偶然ですけどね、ラッキーでした……あー、琥珀さん疲れてますね……いつもコンシーラーなんて使ってませ

んよね？」

「やだ、わかる？」

「ま、私も女なんで。多分男の人はわからないですよ。平気平気」

どうやら化粧で顔色の悪さを誤魔化(ごまか)しているようだ。むう、俺の目じゃいつもより若干目元がキラキラしてるかな？　ぐらいにしか見えん。花音もさりげにアピールしてるけど、こいつも化粧なんてしているのだろうか？

「そりゃしてるよ。すっぴんメイク。ノーメイクはお風呂ぐらいかなー」

していると思しい。おみそれしました。

「でもいくら忙しいって言ったって、琥珀さんが顔に出

るくらい疲れるなんて……やっぱ最近の特異災害のせいですか？」

「ええ。事後処理に追われていてね。一件だって被害への対応に、原因の調査、今後の対応、予防策の立案……書類が山になるっていうのに、こうも続くとね……」

胸の内を吐き出すように、琥珀さんがため息をつく。

「ですよねー、この十日でこれで三件目ですもんね。ちょっと多いですよね」

「六件よ」

「……え？」

思わぬ返答に間抜けな声を出す花音に、琥珀さんがメガネを正してきっぱりと告げた。

「六件。ドーベルマンの件を一件目に数えて、今日のこれで六件目。あなたが解決したドーベルマン、猿、猫に加えて、警ら中のハウンドドッグが保護した特異体が二件、とある高校の校庭に迷い込んだ特異体が一件。その高校の対象は大型犬で、暴走する前に生徒が取り押さえてくれたわ」

琥珀さんが告げた事実は、どう考えても尋常ではなかった。ひと月に二度も起こらない案件が、十日で六件。多すぎるという言葉でも足りない。

――疑念が大きくなる。

「……それ、ほんとですか？」

「残念ながらね。このペースが続くなら悪夢としか言え

ないわ。ＭＤＣは、非常事態宣言の発令を検討している」

非常事態宣言。その響きにどきりとさせられる。先日のドーベルマンの時の特異災害警報とはわけが違う。特異災害警報が局地的、あるいは短期的な処置であるのに対し、非常事態宣言は日本――国の運営そのものを保護するために特別法を発動させるという大がかりな措置だ。

「幸いな事に、直接的な被害はドーベルマンと二ホンザルの時の二件のみ。その中でも重傷者は一人だけ……それも、どれも運良く迅速に対応できているからだわ。対応が遅れれば、場所が悪ければ、特異体の能力が大規模

あるいは高度なものだったら……一つでも当てはまってしまえば、どれだけの被害が出るかわからない」

「……発生件数も洒落にならないですね。調査はどんな感じなんですか？」

「それがさっぱり。そのせいで非常事態宣言って話が出てるんだけど……どの案件でも特異体の移動経路を遡れない。どこから現れたのか、どの管理施設から脱走したのか……全く摑めないの。お手上げだわ」

「つまり、ドーベルマンやニホンザルの時と同じように、急にそこに現れたと？」

花音も俺と同じ疑念を抱いているようだ。確認するように、琥珀さんに尋ねる。

「……目撃証言や監視カメラを追っても、多少遡れる程度で、経路の確認ができるほどではないわ。そういう意味じゃ、そこに現れたと言っても良いかもしれないわね」

「他には？　何か変わったことや不審な点は見つかってないんですか？」

「あったらここまで手詰まりになっていないわよ……いえ、そう言えば」

花音の詰問めいた言葉に、琥珀さんが反応する。

「何かあったんですか？」

「か、関係ないと思うわよ？　ただ、ドーベルマンの件での調査報告に、駅で珍しい遺失物が見つかったらしい

ってのがあったわね。探してるのは特異体の移動経路であって、遺失物じゃないわよって感じよね」

ははは、と乾いた笑いを見せる琥珀さんに、花音がずいっと距離を詰める。

「その珍しい遺失物ってなんですか？」

「衣服よ。男物の一式が揃っていたらしいわ。衣服の一部なら珍しくもなんともないけれど、一式は珍しいみたいね。駅構内で見つかったそうよ。ここで着替えたのかなぁ、なんて駅員が言っていたみたいだけれど……」

疑念が、確信へと変わる。

花音に視線を送る――が、花音はみなまで言うなとばかりに、俺の頭をぽんと叩いた。

「琥珀さん。お願いがあるんですけれど」
「え、何かしら……」
差し迫った様子を見せる花音に、琥珀さんは戸惑いながら問い返す。
そして花音は、口元をひきしめてきっぱりと。
「精神観測者（サイコメトラー）を紹介してください」

イチャウザヒロインと織りなす
新たな現代異能バディアクション！

2019年7月15日頃
全国の書店さまで発売！

GA文庫大賞 GA BUNKO AWARD
奨励賞
第11回